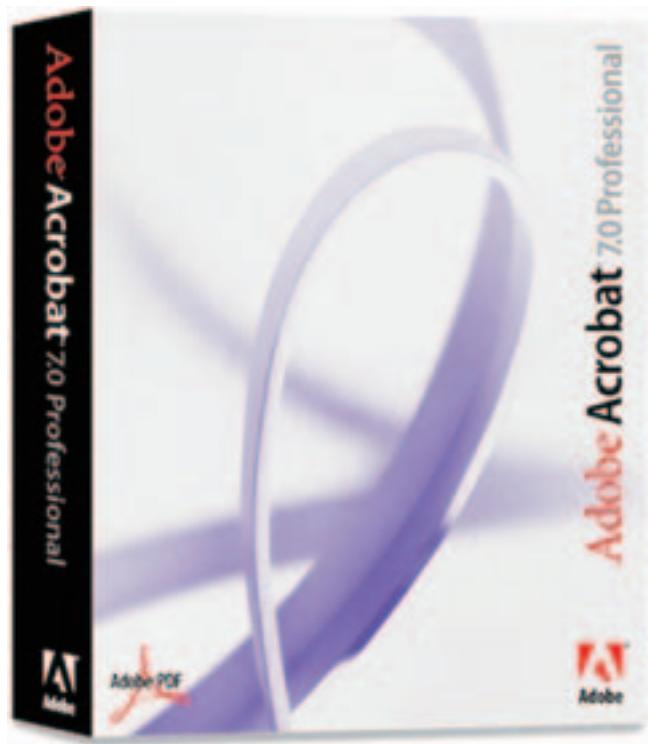


# Adobe® Acrobat® 7.0 Professional

## プリフライトの手引き

Adobe Acrobat 7.0 Professional では、実出力前の最終チェック工程=プリフライト機能が大幅に強化されました。また、利用方法も簡単になっています。この機能を利用することによって、確実で安定した出力が可能になり、日々のデザイン、制作作業を効率化することができます。



# 目次

プリフライト機能を利用して的確な出力を行うには	3
本書の内容	3
レビュー プリフライトの基本事項	4
プリフライトの必要性	4
プリフライトの工程化を	4
プリフライトを行わないと	4
7.0 Pro のプリフライト機能の呼び出し方	4
出力プレビューの使い方	5
表示色は変更できる	7
プリフライト機能の使い方	8
プリフライト結果の見方	9
セクション1 的確なプリフライトのためのガイドライン	12
情勢の変化に対応したワークフローの検討を	12
作成アプリケーションでの事前チェックのポイント	
(1) 画像解像度	12
作成アプリケーションでの事前チェックのポイント	
(2) フォント	12
出力に最適な画像フォーマットは?	12
透明とは? 分割・統合とは?	13
透明は出力前に必ず分割・統合する	13
透明は出力前に必ず分割・統合する	13
透明オブジェクトの抽出	13
分割・統合の実行 (1) プレビュー設定	14
分割・統合の実行 (2) 分割・統合の設定	15
分割・統合の実行 (3) PDF に適用	16
PDF/X-1a として入稿する場合のポイント	16
セクション2 プリフライトでの問題点の摘出と解消	17
出力用プロファイルが添付されていない。	17
誤った出力用プロファイルが添付されている。	17
一部に RGB の画像が混在している。	19
印刷に使わない特色が設定されている。	20
裁ち落とし領域が設定されていない。	20
PDF にトンボを付けたい。	22
スムーズシェードをグラデーションに変換したい。	23
ヘアラインが散見される。検出して、修正したい。	23
PDF/X に変換したい。	24
セクション3 プリフライトのコントロール	26
PDF/X プリフライトプロファイルに	
解像度チェックを追加する	26
プリフライトプロファイルを	
各部門、各マシンで統一したい	27
複数の PDF を一括してプリフライトしたい	28
付録 プリフライトプロファイルの概要	30

## プリフライトの手引き

# プリフライト機能を利用して的確な出力を行うには

### 本書の内容

本書は、Adobe Acrobat 7.0 Professional（以下、7.0 Pro）のプリフライト機能を利用して、高精度出力を確実に行うための方法を紹介するものです。PDFは、高精度出力に利用するために十分な機能を持っていますが、それ以外の用途、たとえば、マルチメディアコンテンツの作成や、eBook、Web、校正などさまざまな用途に利用できます。しかし、高精度出力以外の用途を目的とした機能は、ときとして高精度出力にとっては、問題を引き起こす原因となりかねません。あるいは、高精度出力用に作成されたPDFであっても、制作者のミスやアプリケーションの仕様などによっても、出力に適さないPDFとなっている場合があります。7.0 Proは、さまざまな理由によって生ずる出力上の問題点を広範に摘出し、さらにそれらを修正する機能も持っています。

本書は、こうした問題点の摘出と修正の方法を、具体的な手順で紹介します。高精度出力データの作成、出力の各段階で、本書を座右の書としていただければ、出力トラブルのほとんどは解消できるでしょう。本書は、以下の4つのパートで構成されています。

- ・レビュー プリフライトの基本事項
- ・セクション1 的確なプリフライトためのガイドライン
- ・セクション2 プリフライトでの問題点の摘出
- ・セクション3 プリフライトのコントロール

レビューでは、プリフライトがなぜ必要性かを説明するとともに、7.0 Proのプリフライト機能の全体を概観します。セクション1では、プリフライトを行ううえで、基本的な問題点、抑えておきたい事項などを紹介します。

セクション2では、一定仕様（PDF/X-1a:2001）に沿ったPDFであるための要素を取り上げ、プリフライトをどのように実行するかを紹介します。セクション3では、効率的にプリフライトを行うために、プリフライトプロファイルの編集方法等を紹介します。

## レビュー

# プリフライトの基本事項

ここではプリフライトの必要性とともに、7.0 Pro が持つプリフライト機能の全体を概観します。

## プリフライトの必要性

プリフライトは、印刷用データの最終出力の際、つまりイメージセッタやプレートセッタで出力する際に問題が起こらないかを、出力前にチェックすることです。なぜこのようなプロセスが必要なのでしょうか？ それには2つの理由があります。

1つは、出力用のデータを作成するソフトは、必ずしも PostScript 出力だけを前提としていません。このため、いわゆる DTP ソフトであっても、PostScript に最適化されていないデータを持てるようになっているのです。

むろん、DTP ソフトでないオフィスアプリケーションなどは、最初から PostScript に最適化したデータを作ることができません。つまり、印刷用のデータとして最低限の条件を満たしているのかどうかをチェックするために、プリフライトが必要です。

もう1つは、出力機（RIP）にはいろいろなものが混在していることです。PostScript の最新バージョンは3ですが、PostScript Level 2 対応の RIP も、数多く利用されています。また、PostScript のレベルが同じであっても、そこにはこまかなるバージョンの違いがあります。そこで、RIP の特性に合わせたチェックも必要となります。

## プリフライトの工程化を

「プリフライト」という言葉を使っていなくても、出力のための事前チェックはどこかで誰かがやっています。ただ、現状では、その作業の多くが、担当者の個人的な努力で行われている例が多く見られます。プリフライトは、これを行うことによって、版のいたずらな損耗を防ぐことができるだけでなく、工程の後戻りも防ぐことができ、生産コスト全体を低減するのに大きく貢献します。ですから、プリフライトは担当者の個人的な努力に依存するのではなく、1つの工程として組み込むことが望されます。

たとえば、2つの段階でプリフライトを行うことによって、デザイン、制作、出力の各部門に大きな恩恵を与えることができます。最初にデザイン、制作工程では、最低限のプリフライトを行い、一般的な出力機であれば出力できるレベルであるかをチェックします。これによって、制作データがデータの不備を理由にデザイン、制作部門に戻ってくる可能性は非常に小さくなります。さらに、出力部門では出力機の特性に合わせたチェックを行います。この段階では、たいていの場合、データをデザイン、制作部門に戻す必要はなく、出力データをその場で微調整するだけで出力できます。

## プリフライトを行わないと…

前記と逆の場合を想定してみましょう。プリフライトを行わずに、出力部門にデータを渡してしまった場合です。比較的簡単な問題で

あれば、出力部門で修正することが可能ですが、データを修正すること自体が後日問題となる場合もあります。出力部門では、クライアントの意向や最終出力イメージはほとんど分からぬことが多いからです。

また、軽微な問題であっても、その点数が非常に多い場合には、マンパワーが必要となり、出力部門では対応できなくなります。あれこれ作業をした挙句、結局、デザイン、制作部門でないと処理できないという結論になり、納期的に厳しい状況に追い込まれ、そこで新たな問題を起こすことにもなりかねません。

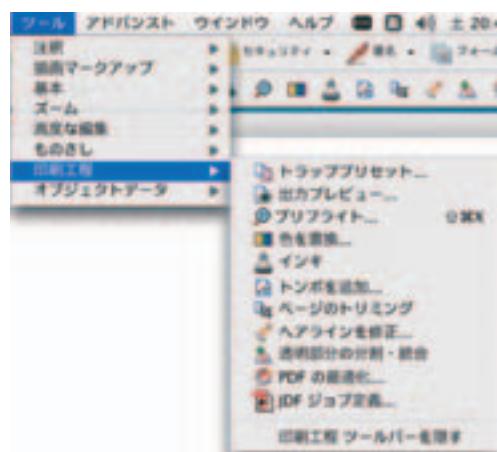
このように、プリフライトを行わないで、最終出力部門にデータを流すことは、納期を苦しくし、場合によっては、版の損耗など実損も伴わせる結果となりかねません。

本書では、PDF をベースとしたプリフライトの方法を、Adobe Acrobat 7.0 Professional 上で紹介しますが、PDF を利用しない出力の場合も、同じようにプリフライトを工程化することをお勧めします。

## 7.0 Pro のプリフライト機能の呼び出し方

7.0 Pro では、PDF をプリフライトするための機能は、出力プレビューとプリフライトの2箇所に分かれています。出力プレビュー機能は、インキと色の問題を個別にチェックするものです。プリフライト機能は、出力に伴うほとんどの問題をチェックできます。

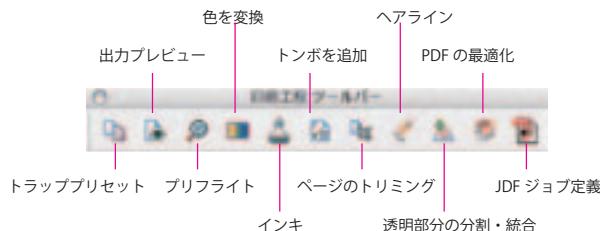
これらの機能は、メニューでは [ツール] メニュー → [印刷工程] のサブメニューにまとめられています。また、[ツール] メニュー → [印刷工程] → [印刷工程ツールバーを表示] を選択すると、ツールバーとして表示され、隨時ワンクリックで利用できます。[印刷工程ツールバー] は、デフォルトではフローティングパレットとして表示されますが、ドラッグ＆ドロップでツールバーに固定することもできます。以下、操作説明に関しては [印刷工程ツールバー] を利用します。



[ツール] メニュー → [印刷工程]

## 【印刷工程ツールバー】

[ツール] メニュー → [印刷工程] → [印刷工程ツールバー]



## 出力レビューの使い方

出力レビューを利用するには、[印刷工程ツールバー] の [出力レビュー] ボタンをクリックします。[出力レビュー] ダイアログが表示されます。

## ・特定部分のインキ濃度のチェック

最初に、出力対象となるカラースペースを [シミュレーションプロファイル] プルダウンメニューから選択します。選択したカラースペースにしたがって、カーソルでポイントした座標のインキ濃度が [色分解] 欄に表示されます。

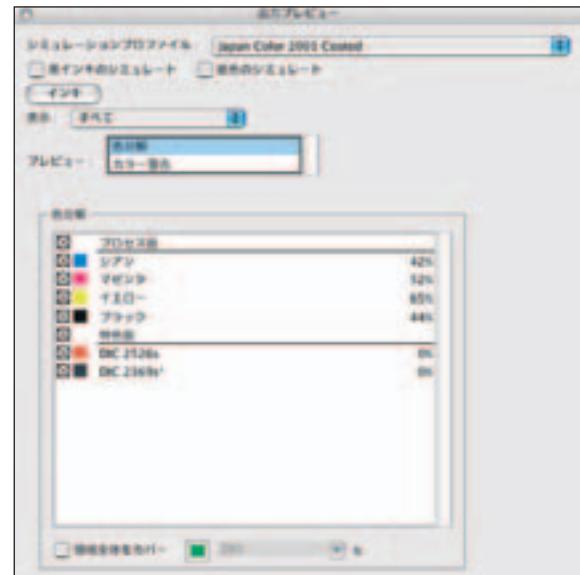
[黒インキのシミュレート] / [紙色のシミュレート] チェックボックスをチェックすると、選択したプロファイルにしたがって、レビューします。

## ・カラースペースのチェック

[表示] プルダウンメニューで、カラースペースを選択すると、対応するオブジェクトのみが表示されます。たとえば、[RGB] を選択すると RGB オブジェクトのみが表示されます。

[表示] プルダウンメニューにあるスムーズシェードは、出力機の解像度に応じて最適なグラデーションを再現する仕組みです。しか

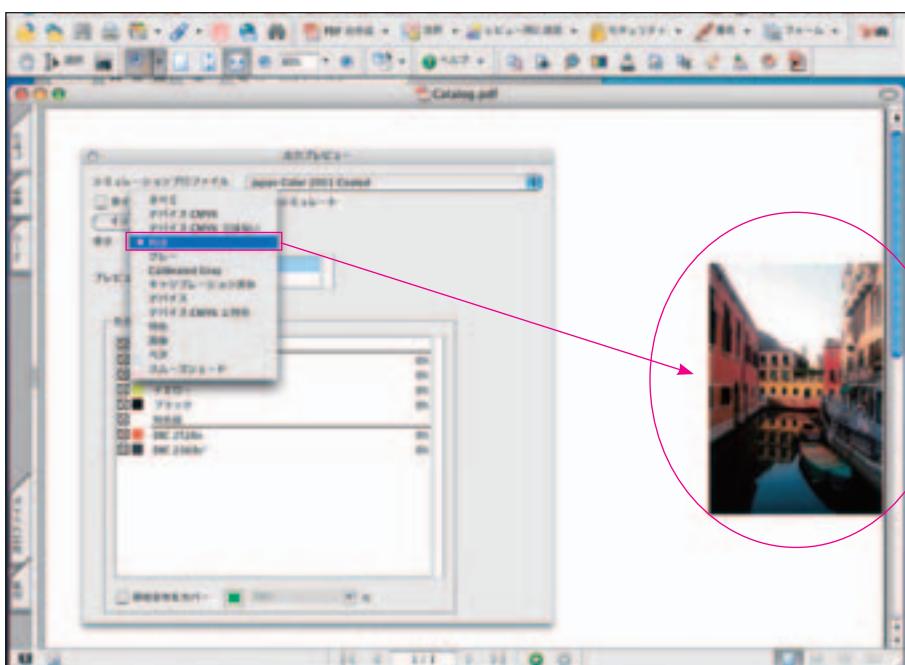
## 【出力レビューダイアログ】



し、印刷ではデバイスに最適化した確定したグラデーションが欲しい場合があります。そのために事前にスムーズシェードを利用したオブジェクトを把握する必要があります。スムーズシェードは、後述する [透明の分割・統合] ツールによって、ベクトルデータとビットマップデータに変換できます。

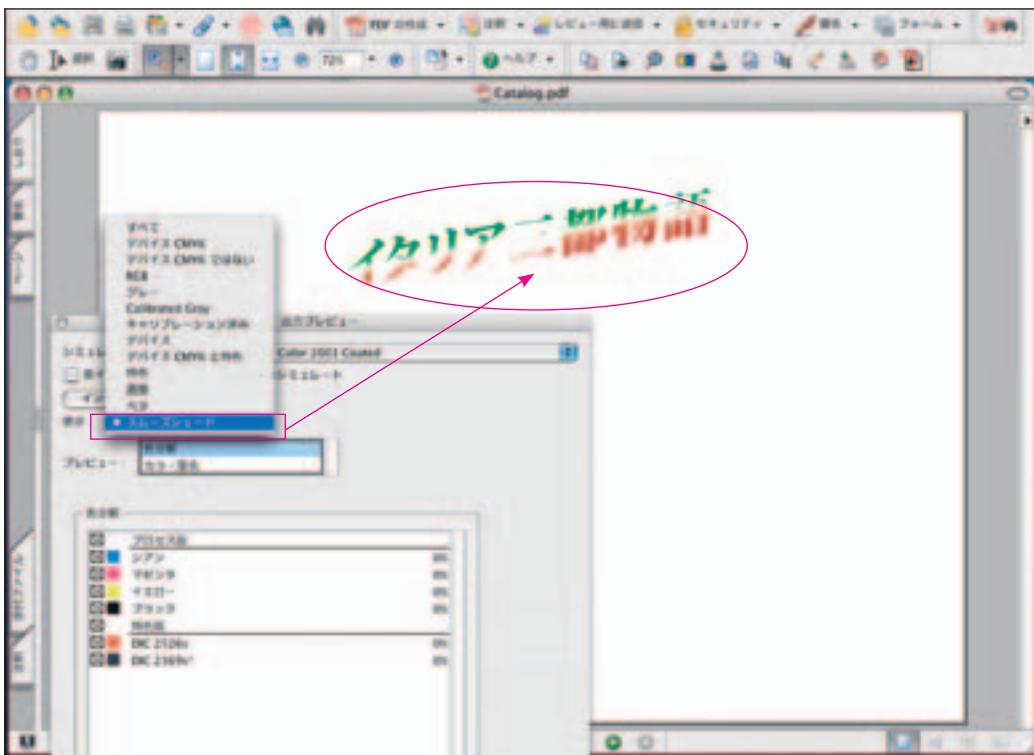
## ・インキ総量のチェック

[出力レビュー] ダイアログ最下部にある領域全体をカバーをチェックし、右側のプルダウンメニューからパーセンテージを選択すると、選択したパーセンテージを超えるインキ総量の領域が緑色で表示されます。入力ボックスに直接数値を入力することもできますので、プルダウンメニューにはない数値を入力することもできます。

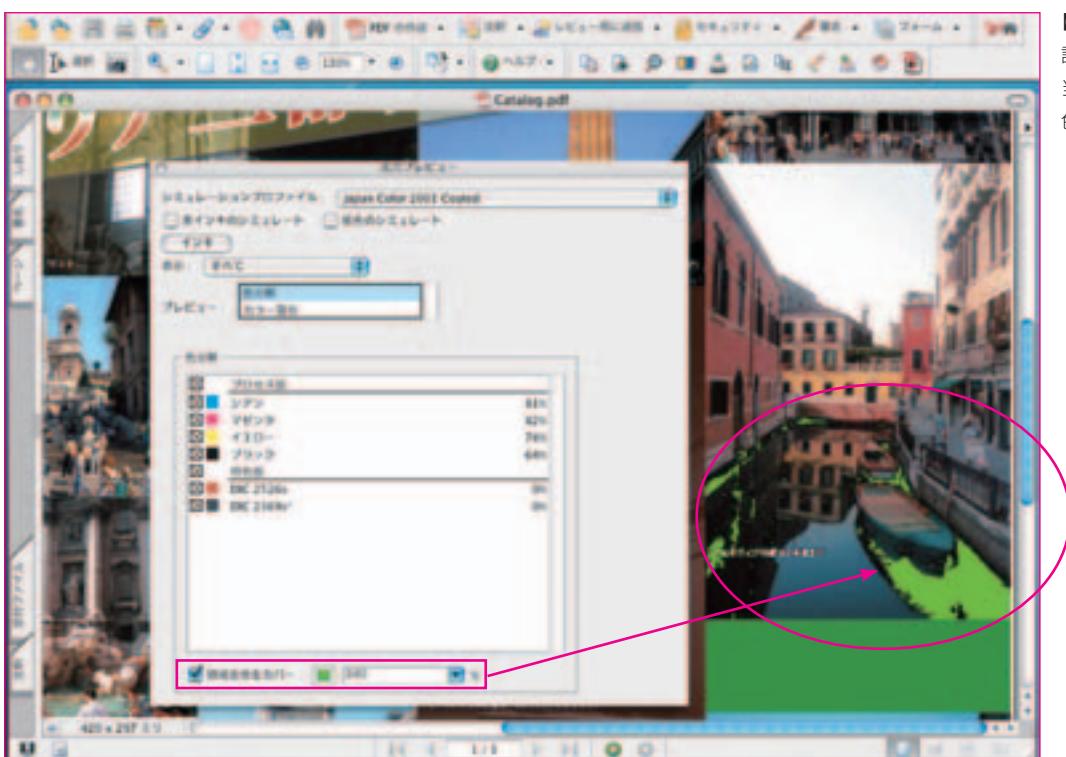


## 【出力レビューでの RGB データ表示】

[表示] プルダウンメニューで、[RGB] を選択すると RGB オブジェクトのみが表示されます。



【スムーズシェード表示】  
[表示] ブルダウントメニューで、[スムーズシェード]を選択するとスムーズシェードオブジェクトのみが表示されます。



【インキ総量表示】  
設定されたインキ総量に該当する部分は、画面上に緑色で表示されます。

インキは総量が300%を越えるあたりから、後から刷るインキのりが悪くなります。そこで、安定した発色を得るためにインキ総量を制限する場合があります。[出力プレビュー]ツールを利用することで、問題が起きそうな部分を出力前に把握することができます。広告代理店等、インキ総量の制限が多い印刷物を扱う企業にとっては大変便利です。

また、インキ総量が多いページと少ないページが混在していると、

印刷のときに問題が起こりがちですが、これも事前にチェックすることができます。

なお、インキ総量が制限を超える場合は、後述する[インキ]ツールによって、各インキの濃度値を調整することによって、抑制することも可能です。しかし、その場合、ページ全体の本来のカラーバランスを崩すことになりますので、できるだけオリジナルデータ上で、問題のある画像のみを調整することをお勧めします。

### 表示色は変更できる

インキ総量が設定を超える場合の表示色は、デフォルトでは黄緑になっていますが、この色は変更することができます。変更するには、インキ総量を入力するボックスの左側の黄緑のボタンをクリックします。プルダウンメニューが表示されます。ここから任意を色を選択すると、その色が以降デフォルトの表示色になります。[他のカラー] を選択するとOSのカラーパレットが表示されますので、一覧にない色も利用できます。



### ・オーバープリントのチェック

[出力プレビュー] ダイアログの [プレビュー] 欄で、[カラー警告] を選択すると、ダイアログの下部が変化し、[警告] 欄が表示されます。[オーバープリント] チェックボックスをチェックすると、オーバープリントが設定されている箇所がオレンジ色で表示されます。表示色は任意の色を利用できます。他の色を利用する方法については、このページ上段のコラムを参照してください。

一般的的な印刷方法では、墨文字などK 100%以外の部分にオーバープリントは設定しません。設定されている場合は、オリジナルデータに戻ってオーバープリントを解除してください。なお、レイアウトソフトでは一般に、墨文字はオーバープリントが自動的に設定されます。

また、オーバープリントの設定が印刷でどのように反映されるかは、[アドバンスト] メニュー→ [オーバープリントプレビュー] を選択すると確認できます。また、カラープリンタなどにコンポジット出力しても確認できます。

### ・リッチブラックのチェック

[警告] 欄で [リッチブラック] チェックボックスをチェックすると、

リッチブラックになっている箇所が水色で表示されます。

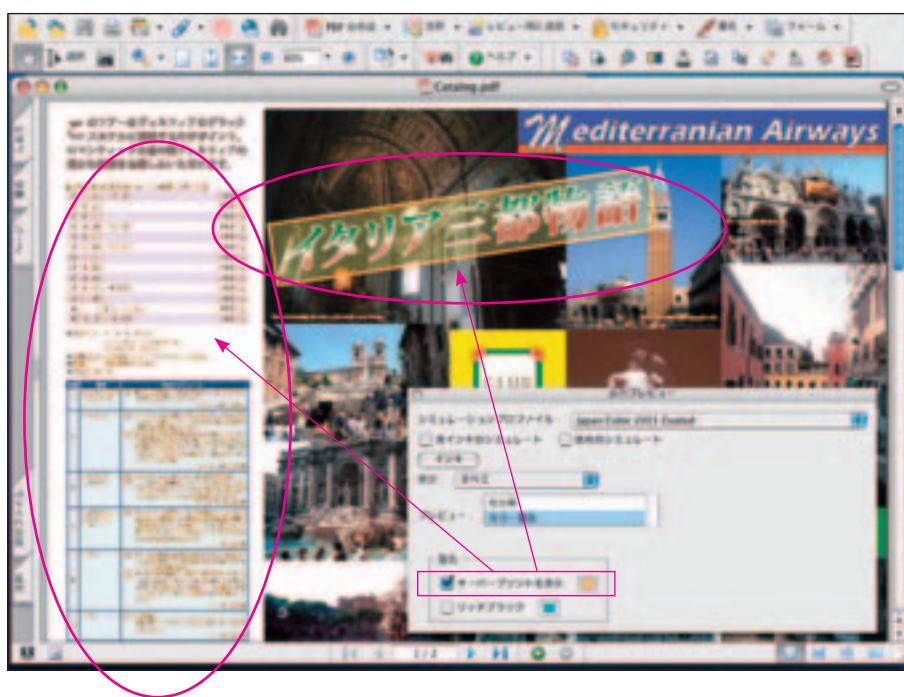
表示色は任意の色を利用できます。他の色を利用する方法については、このページ上段のコラムを参照してください。

### ・濃度値、トラップの順序などを設定できる [インキ] ツール

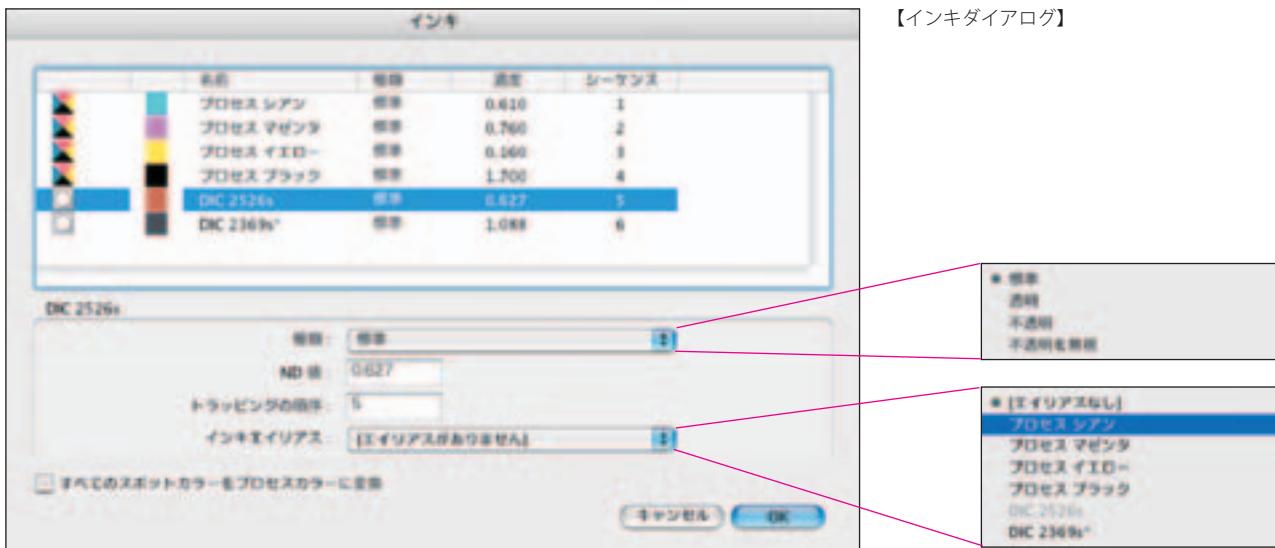
[インキ] ツールは、インキの種類（標準、透明、不透明）、濃度値、トラップの順序、インキエイリアスを設定する機能です。濃度値を調整することによって、トラップを正確に配置することができます。[インキ] は、最終出力を行う企業（出力ショップ、印刷会社等）のための機能です。最終出力よりも手前で作業をする部門ではこの設定は変更しないでください。

[インキ] ツールは、以下の3つの方法で呼び出すことができます。いずれの操作を行った場合も、[インキ] ダイアログが表示されます。

- (1) [出力プレビュー] ダイアログで [インキ] ボタンをクリックする。
- (2) [印刷工程ツールバー] で [インキ] ツールをクリックする。
- (3) [ツール] メニュー→ [印刷工程] → [インキ] を選択する。



【オーバープリント表示】



種類：インキの種類を選択します。

ND 値：濃度値を設定します。

トラッピングの順序：印刷の順序を設定します。

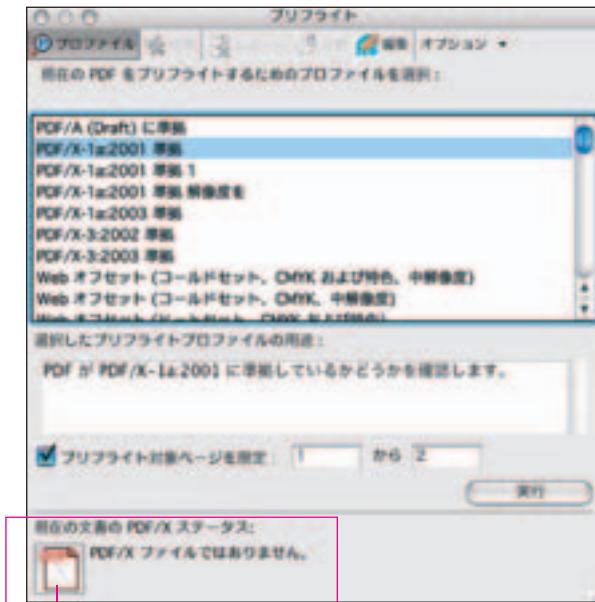
インキエイリアス：特色を他の特色、またはプロセスカラーに変換します。プルダウンメニューから変換する色を選択します。

すべてのスポットカラーをプロセスカラーに変換：すべての特色をプロセスカラーに変換します。

チェックボックスをチェックすると、[出力プレビュー] が実行されている場合は、直ちにシミュレーションが行われます。[インキ] ダイアログの [OK] ボタンをクリックすると確定します。[OK] ボタンをクリック後は、この操作は取り消すことができません。

[インキ] は、Adobe InDesign の [インキ管理] と同じ機能です。

#### 【プリフライトダイアログ 初期状態】



現在の PDF (アクティブになっている PDF) を PDF/X に変換します。この機能の詳細は、「セクション 2」「PDF/X に変換したい」(24 ページ) を参照してください。

#### プリフライト機能の使い方

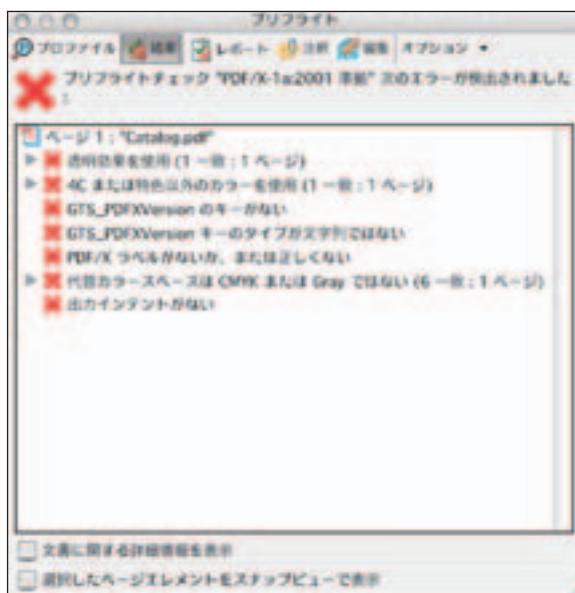
プリフライト機能を利用するには、[印刷工程ツールバー] – [プリフライト] ボタンをクリックします。[プリフライト] ダイアログが表示されます。

##### ・プリフライトの実行

プリフライトを実行するには、ダイアログの [現在の PDF をプリフライトするためのプロファイルを選択] 欄でプリフライトプロファイル (以下、プロファイル) を選択します。ここでは、[PDF/X-1a:2001 準拠] を選択します。その後に [実行] ボタンをクリックします。

[注釈] PDF/X-1a:2001 と PDF/X-1a:2001 との主な違いは、PDF のフォーマットです。2001 では Acrobat 4.0 (PDF 1.3) ですが、2003 では Acrobat 5.0 (PDF 1.4) となっています。なお、PDF 1.4 では透明 (ライブ透明) を保持できますが、2001 と同様、2003 でも透明は禁止されています。

#### 【プリフライト実行後のプリフライトダイアログ】



【実行】ボタンをクリックすると、ダイアログ上端のタブがすべてアクティブとなり、【結果】タブが選択された状態となります。また、プロファイルが表示されていた欄が、問題点を指摘する内容に変わります。問題点は行頭に赤い×印が付きます。

#### ・プリフライト結果の見方

【プリフライト】ダイアログは、通常のウィンドウと同様の操作で拡大縮小ができます。また、行頭に [▶] マーク (Mac 版。Windows 版では [+] マーク) が付いている行は、さらに詳細な内容があります。マークをクリックすると、詳細が表示されます。オブジェクトを示す行をダブルクリックすると、対象のオブジェクトが赤い点線で囲まれます。オブジェクトが表示領域内の外にある場合は、オブジェクトの位置まで表示が移動します。他のページにある場合はページも移動します。

点線で囲まれる範囲は、オブジェクト全体を表示し、問題がある部分はさらに一部である場合があります。これを確認するには、ダイアログ下端の【選択したページエレメントをスナップでプレビュー】をチェックします。【プリフライト：スナップビュー】ダイアログが表示されます。その後に、任意のオブジェクトを示す行をクリックすると、問題のあるオブジェクトが単独で表示されます。

【プリフライト：スナップビュー】ダイアログも、通常のウィンド

ウと同様の操作で拡大縮小ができます。また、オブジェクトの背景色は、【背景色】プルダウンメニューから選択できます。

#### ・プリフライト結果を注釈として書き出す

プリフライト結果は、注釈として書き出すことができます。注釈として書き出すには、【プリフライト】ダイアログ上端の【注釈】タブをクリックします。

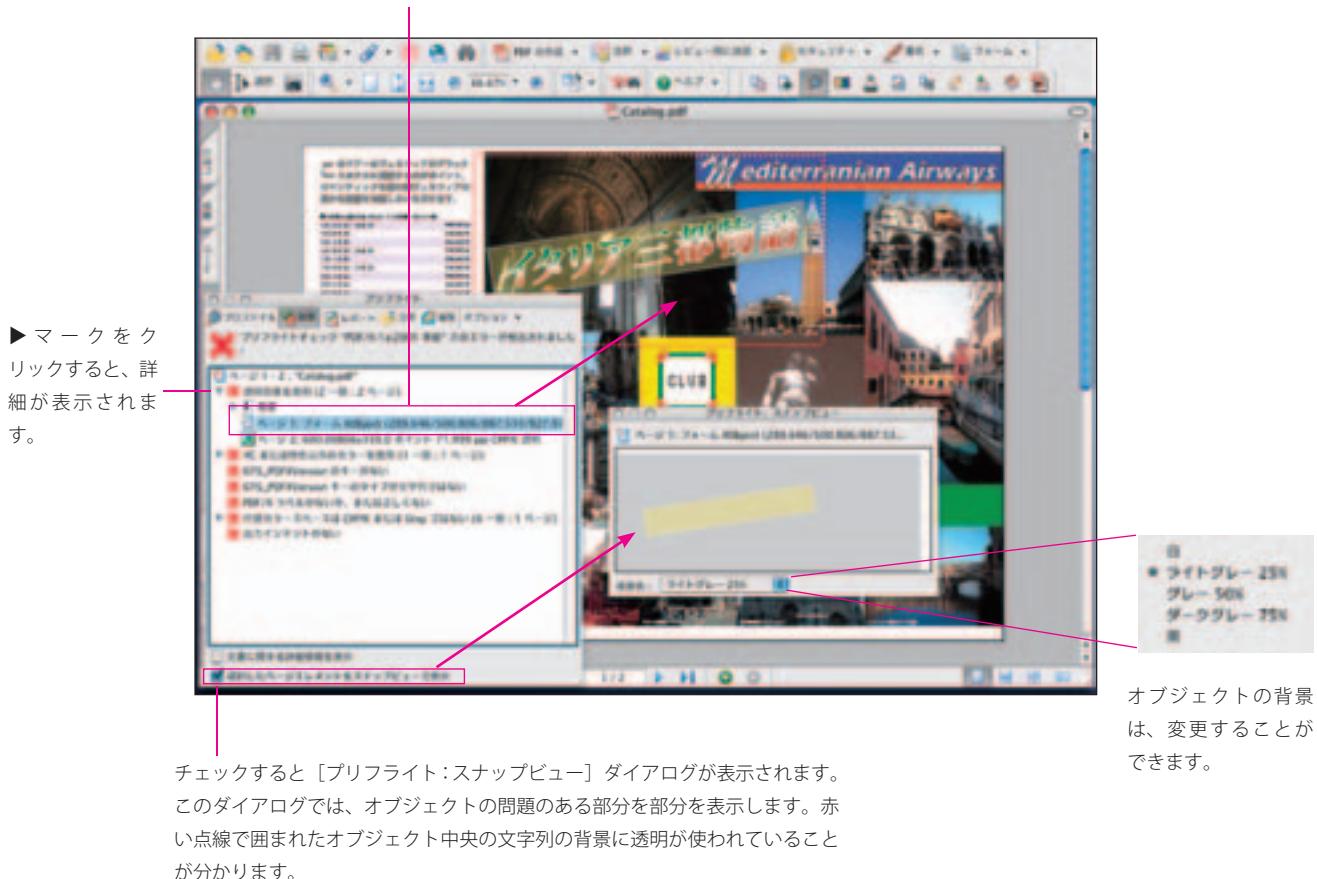
注釈の対象となっている部分は、赤い点線で囲まれます。ノートアイコンにカーソルを当てるとき、ポップアップヒントが表示され、問題点が示されます。また、赤い点線、またはノートアイコンをクリックすると、ポップアップノートが開かれ、問題点が示されます。作成された注釈は、一般的の注釈と同じ使い方ができます。ポップアップノートに書き込みを加えることができます。また、【注釈】タブをクリックすると、一覧で表示することもできます。

#### ・プリフライト結果を外部ファイルとして書き出す

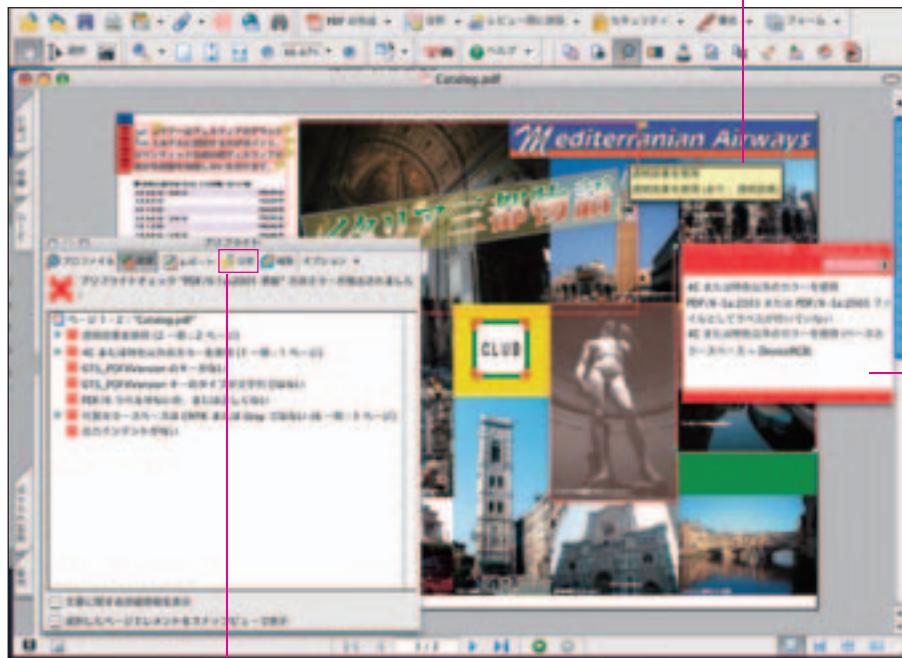
プリフライト結果は、外部ファイルとして書き出すことができます。書き出しファイル形式は、PDF、XML、Text の 3 種類です。書き出しを行うには、【プリフライト】ダイアログ上端の【レポート】タブをクリックします。以下、Mac 版と Windows 版で少し操作が異なります。

行をダブルクリックすると、対象のオブジェクトが赤い点線で囲まれます。

#### 【プリフライト結果の見方】



ノートアイコンにカーソルを当てるとき、ポップアップヒントが表示され、問題点が示されます。



【プリフライト結果の注釈への書き出し】

赤い点線、またはノートアイコンをクリックすると、ポップアップノートが開かれ、問題点が示されます。

[注釈] タブをクリックします。

#### 【Mac 版】

[レポート] タブをクリックすると、[保存] ダイアログが表示されます。ファイル名を入力します。デフォルトでは「主ファイル名\_report.pdf」という名前が設定されていますが、任意のものに変更できます。拡張子(.pdfなど)は必ず残してください。拡張子は、ファイルフォーマットを選択すると自動的に設定されます。

その後に、書き出すファイルフォーマットを選択します。PDFで書き出す場合には、オプションが利用できます。オプションの意味については、後述「プリフライトレポート (PDF) の見方」を参照してください。

[保存] ボタンをクリックすると、指定したフォーマットで保存され、PDFの場合、直ちに開かれます。XML、Textで書き出した場合、レポートは自動的には開かれません。保存フォルダを開いて、適当なアプリケーションで開く必要があります。

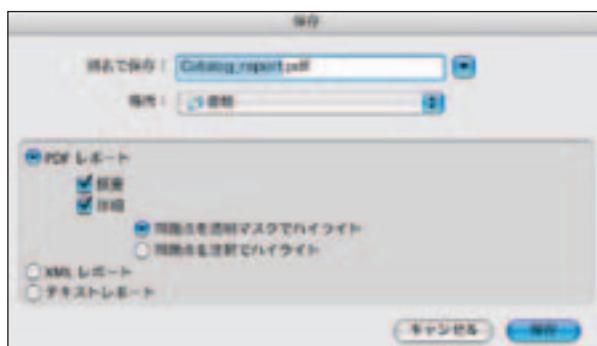
#### 【Windows 版】

[レポート] タブをクリックすると、[名前を付けて保存] ダイアログが表示されます。まず、[ファイルの種類] プルダウンメニューからファイルフォーマットを選択します。ついで、ファイル名を入力します。デフォルトでは「主ファイル名\_report.pdf」という名前が設定されていますが、任意のものに変更できます。拡張子 (.pdf など) は必ず残してください。拡張子は、ファイルフォーマットを選択すると自動的に設定されます。

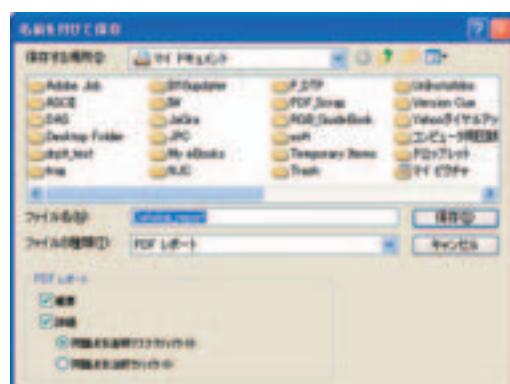
PDFで書き出す場合には、オプションが利用できます。オプションの意味については、後述「プリフライトレポート (PDF) の見方」を参照してください。

[保存] ボタンをクリックすると、指定したフォーマットで保存され、PDFの場合、直ちに開かれます。XML、Textで書き出した場合、レポートは自動的には開かれません。保存フォルダを開いて、適当なアプリケーションで開く必要があります。

#### 【Mac 版のレポート保存ダイアログ】



#### 【Windows 版のレポート保存ダイアログ】



#### ・プリフライトレポート（PDF）の見方

プリフライトレポートを PDF として書き出す場合、オプションがあります。【概要】のみをチェックすると、問題点を指摘した叙述（文字）のみの PDF が作成されます。これは、プリフライトダイアログの【結果】タブに表示されるすべての内容です。

【詳細】をチェックすると、ページデータ上に問題点を指摘したものが作成されます。【概要】【詳細】は、片方だけを設定することも、両方設定することもできます。

【詳細】は、問題点の指摘方法を、透明マスクにするか、注釈とするかを選択できます。これが、【問題点を透明マスクでハイライト】と【問題点を注釈でハイライト】です。注釈を選択すると、オリジナルファイルでプリフライト結果を注釈として書き出したものと同

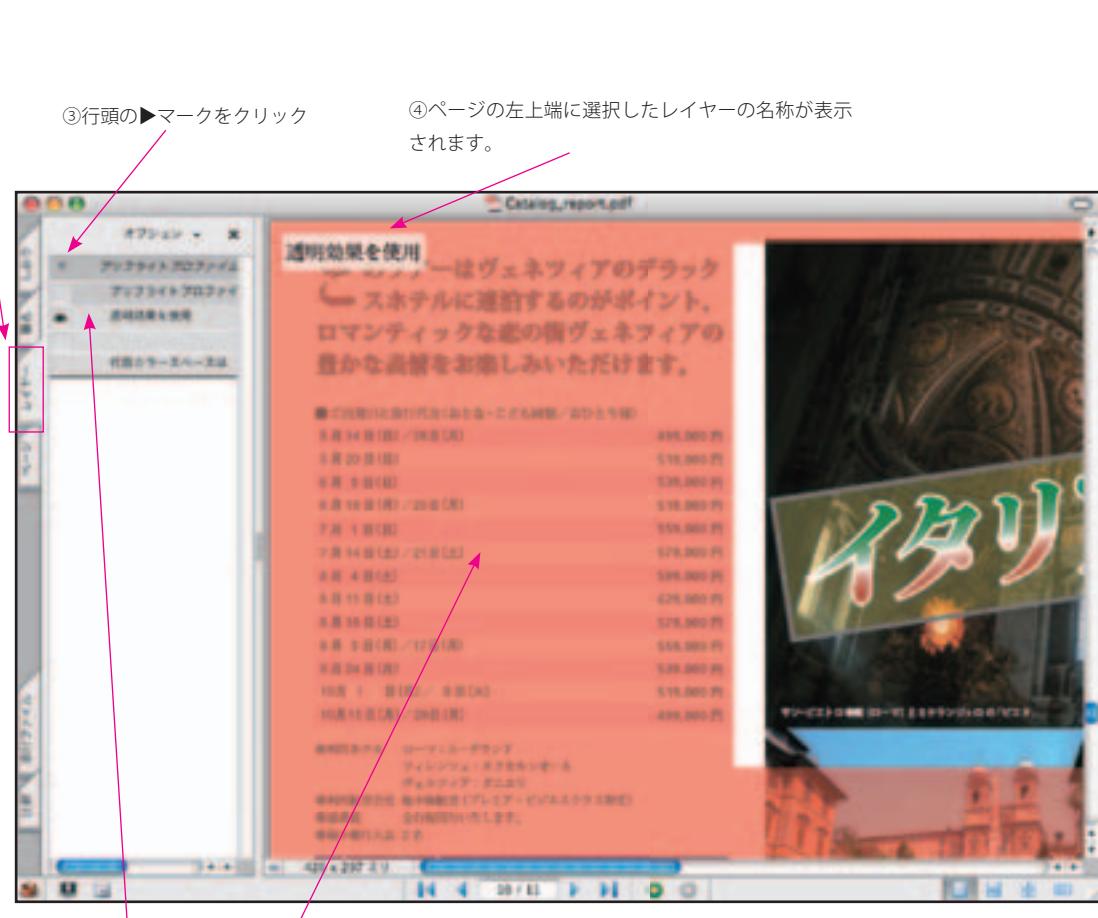
じものが作成されます。透明マスクは、問題のあるオブジェクトの上に赤い透明なマスクをかぶせます。

透明マスクを使った PDF レポートの場合、問題点ごとにレイヤ化されています。レポートの PDF を開いて、レイヤーが表示されていない場合は、レイヤータブをクリックします。デフォルトでは、レイヤーは表示されていません。行頭の [▶] マーク（Mac 版、Windows 版では [+] マーク）をクリックするとレイヤーパネルが表示されます。

ページデータのページを表示した状態で、表示したい問題点のレイヤーをクリックすると、その問題点のみが表示されます。また、ページの左上端に選択したレイヤーの名称が表示されます。

①【詳細】は、【概要】の後のページに配置されます。  
②レイヤータブをクリック

#### 【プリフライトレポートの見方】



④表示したい問題点のレイヤーをクリック。行頭に目の形のアイコンが現れ、問題点が赤い透明なマスクで表示されます。

## セクション1

## 的確なプリフライトのためのガイドライン

ここでは、プリフライトを行ううえで、日常起こりがちな問題点の発見と、発見後の対処法などについて説明します。

## 情勢の変化に対応したワークフローの検討を

従来のDTPワークフローでは、カラーデータはデバイスCMYKにして、レイアウトソフトに貼り込む方法が一般的でした。しかし、デジタルカメラの普及で、RGBデータが急速に増加し、画像データが適切に変換されずにワークフローに組み込まれる例が増えています。

RGBデータがRGBのまま出力部門まで持ち込まれる例も少なからずあります。出力部門では、RGBの種類も最終出力イメージが分からなければCMYK変換を行うとトラブルになりかねないため、これを制作部門に戻さざるを得ません。

これは大変難しい問題ですが、一般論としては、誰がどのタイミングでCMYKに変換するかを、きちんと話し合うことが必要です。また、後工程でCMYK変換を行う場合には、前工程ではカラーマネージメントを行い、CMYKで出力した場合の結果を予測できるようにしておかなくてはなりません。

最近は、制作部門ではカラー変換を行わず、出力部門ですべてのデータを一括して変換するワークフローが、一部の企業の間で採用されています。いわゆるRGBワークフローです。この場合の制作部門でのポイントは、トリミング（場合によってはリサイズも含む）以外の画像処理を行わないことです。

制作部門でシャープネス処理などの製版処理を行っても、それがむだになるばかりか、処理後のデータは出力部門では利用できず、オリジナル画像に戻って処理をやり直さなくてはならなくなることがあるからです。

## 作成アプリケーションでの事前チェックのポイント

## (1) 画像解像度

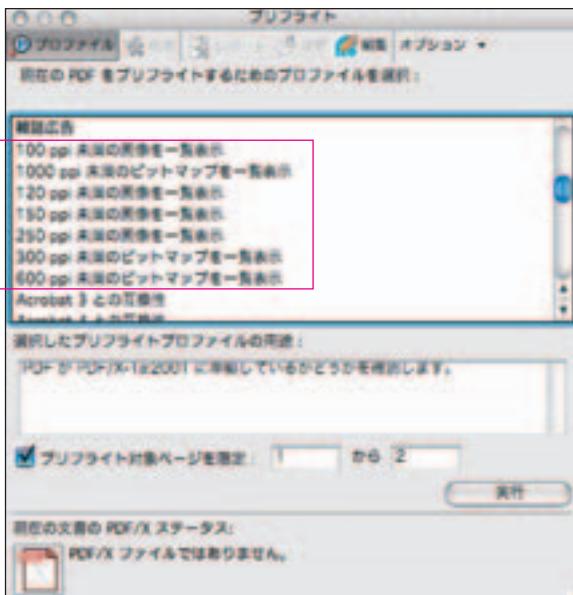
7.0 Proでは、多くのデータ修正機能を搭載しました。これによって、軽微な過ちの多くは出力部門でも処理できるようになりました。しかし、データの精度が足りない場合など、オリジナルデータに戻らないと対応できない場合もあります。

こうした後戻りを避けるには、制作部門で作成アプリケーション上で可能な限りチェックする必要があります。アプリケーション上のチェックのポイントは、画像とフォントです。

印刷用の画像データは、300～350dpiとするのが一般的です。解像度に関しては必ず制作部門と出力部門で合意しておく必要があります。解像度は画像のリサイズによっても変化します。リサイズする場合には、必ずリサイズ後の解像度を計算する必要があります。また、デジタルカメラのデータは一般に72dpiしかありません。したがって、最低でも4分の1以上(24%以下)に縮小する必要があります。これは、画像を直接処理する場合はもちろんですが、レイアウトソフト上でリサイズする場合にも必ず念頭におく必要があります。

## 【解像度チェックのプロファイル】

解像度のみをチェックするプリフライトプロファイルは7つあります。プロファイル名中に「[画像]」があるのは、カラーおよびグレースケール画像を差します。「[ビットマップ]」は、モノクロ(2値)画像のことです。



あります。

プリフライトプロファイルには、解像度や画像の種類のチェックのみを行うものもあります。プリフライトでは、問題のある画像を一度の処理で全部発見できます。画像が多数に上る場合には、PDFに変換後、これらのプロファイルを利用してチェックする方が、アプリケーション上で1個ずつ画像を確認するよりもはるかに効率的です。

## 作成アプリケーションでの事前チェックのポイント

## (2) フォント

フォントに関しては、埋め込めるフォントを利用することです。これはPDFワークフローを使う場合当然のことですが、PDFを使わない場合も推奨します。埋め込めないフォントを使う場合、制作部門では出力部門の出力機に当該のフォントがあるかを確認しなければなりません。

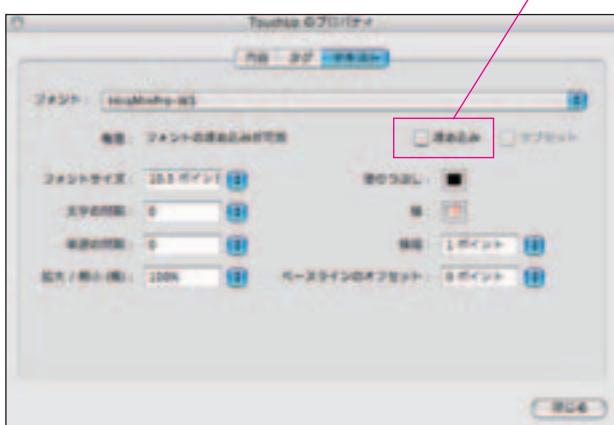
フォントの埋め込みの有無をチェックするには、「[埋め込まれていないフォントを使用しているテキストを一覧表示]」プリフライトプロファイルを利用します。

## 出力に最適な画像フォーマットは?

従来のワークフローでは、どのような画像フォーマットであっても、EPSなど変換してからレイアウトソフトに貼り込むのが常識でした。しかし、現在はさまざまなフォーマットの画像をそのまま貼

### 【7.0 Pro 上でのフォントの埋め込み】

埋め込まれていないフォントは、TouchUp テキストツールを利用する事で埋め込むことができます。[TouchUp のプロパティ] ダイアログ-[テキスト] タブで、[埋め込み] をチェックすると、システムにあるフォントであれば埋め込まれます。また、システムにないフォントの場合、システムにあるフォントに置き換えることもできますが、これを実行すると、文字組みが変化します。システムにないフォントの場合、オリジナルファイルを作成した部門に戻して、埋め込みし直すことを推奨します。



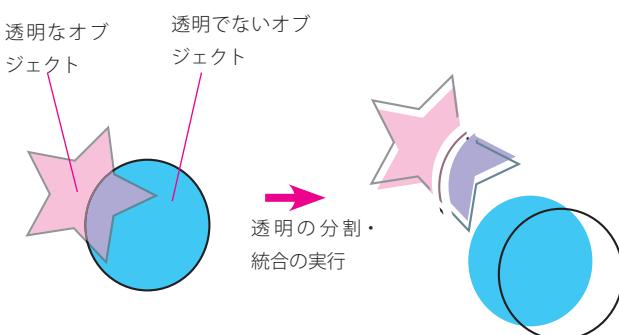
り込む方法も行われるようになってきました。

画像点数の少ない仕事であれば、出力上問題がなければ複数のフォーマットが混在しても差し支えありません。しかし、画像点数の多い仕事では、できるだけフォーマットを統一することが求められます。

これは、解像度やプロファイル、色空間などの設定がフォーマットごとに異なり、その調整、確認が煩雑なるからです。フォーマットを統一することにより、調整、確認が一定の手順で処理できるようになります。また、調整、確認の作業中の操作誤りなども防ぐことができます。

### 透明とは？ 分割・統合とは？

最近は、オブジェクトに透明効果を施すことができるアプリケーションが増えてきました。透明はアプリケーションによって、使われている技術がさまざまです。このため、高精度出力を行った場合、画面表示やプリンタ出力とは、大きく異なる結果を生むことがあります。場合によっては、出力ができないこともあります。



これは透明がラスターデータとベクトルデータを統合したオブジェクト形式になっているためです。ラスターデータのみで構成された透明と区別するために、ライブ透明（以下、単に透明と呼びます）と呼ぶこともあります。

透明オブジェクトを出力する場合、必ず通常のラスターデータとベクトルデータに分解されます。これを透明の分割・統合と呼びます。分割・統合は透明効果を施したオブジェクトだけでなく、透明オブジェクトと重なり合う透明でないオブジェクトにも影響します。さらに、オーバープリントの設定が変更される場合もあります。

### 透明は出力前に必ず分割・統合する

前述のような問題が起こるのを避けるためには、透明なオブジェクトを持つデータは、必ず PDF に変換することを推奨します。これによって、高精度出力時のオブジェクトの変化を確認できます。Adobe InDesign、Adobe Illustrator などの透明効果は、アプリケーションから直接 PDF を書き出す場合には、透明が維持することができます。また、これらのアプリケーションでは、アプリケーションの内部で透明の分割・統合を行うことができます。

こうしたアプリケーションのデータの場合、アプリケーション上で透明を分割・統合し、出力したり、PDF 変換をしたりできます。ただし、アプリケーション上での透明分割・統合は、ラスタライズの精度などを出力条件に沿ったものにしなければなりません。また、アプリケーション上では分割・統合後のデータの変化を確認することはできません。このため、分割・統合は後工程寄りの部門で、PDF 上で処理するのが安全といえます。

7.0 Pro では、プリフライトで透明をチェックできるだけでなく、その分割・統合し、結果をモニタ上で確認することも可能です。なお、透明の分割・統合については、弊社発行のパンフレット「透明の手引き」も参照してください。以下では、7.0 Pro での分割・統合の手順の要点のみを紹介します。

### 透明オブジェクトの抽出

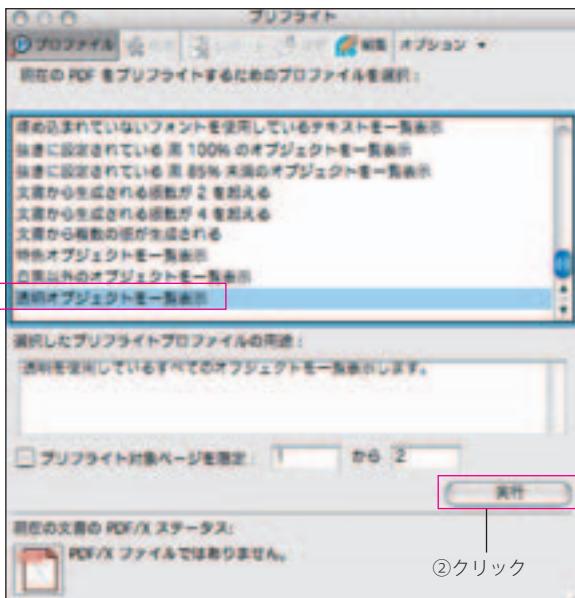
7.0 Pro での透明の分割・統合の手順は、大きく次の 2 つの部分に分かれます。

- (1) プリフライト機能で透明なオブジェクトを抽出する。
- (2) 抽出した透明オブジェクトを、[透明部分の分割・統合] 機能で分割・統合する。

プリフライト機能で透明なオブジェクトを抽出するには、まず、[印刷ツールバー] から [プリフライト] ツールをクリックします。起動した [プリフライト] ダイアログで [透明オブジェクトを一覧表示] を選択し、[実行] ボタンをクリックします（図次ページ上段）。プリフライト結果を表示するダイアログ上で、チェックされたオブジェクトをダブルクリックします。オブジェクトが赤い点線で囲まれます。また、[選択したページエレメントをスナップビューで表示] をチェックしても、チェックされたオブジェクトを確認できます（図次ページ下段）。

【プリフライト機能での透明の検出】

①クリック



②クリック

分割・統合の実行（1）プレビュー設定

[透明部分の分割・統合] ツールを利用する場合、[プリフライト] ダイアログを閉じる必要はありません。[印刷工程ツールバー] の各ツールは、同時に利用することができます。7.0 Pro では、透明の分割・統合はページ単位で行うことができますが、ダイアログ上のプレビューは、ダイアログを起動したときに

開かれているページに固定されます。オブジェクトごとに分割・統合条件を変える場合には、対象となるオブジェクトを表示した状態で [透明部分の分割・統合] ツールを起動してください。

[印刷工程ツールバー] の [透明部分の分割・統合] ツールをクリックします。[分割・統合のプレビュー] ダイアログが表示されます(図次ページ上段)。このダイアログの各項目の意味は次の通りです。

[更新] ボタンは、ダイアログの各設定を変更した場合にクリックします。設定された条件で、そのつど右側のプレビューに表示されます。プレビューをクリックすると、クリックした部分を中心に拡大表示します。[option] キー(Mac 版、Windows 版では [Ctrl] キー)を押しながらクリックすると縮小します。

各設定を行い、[更新] ボタンをクリックしても、文書上の透明部分が分割・統合されるわけではありません。プレビューされるだけです。実際の分割・統合は [PDF に適用] — [適用] ボタンをクリックしたときに行われます。

[ハイライト表示] プルダウンメニューの各項目は、ハイライト表示するオブジェクトを選択するものです。ハイライトは、赤い透明なマスクで行われます。

・なし (カラープレビュー)

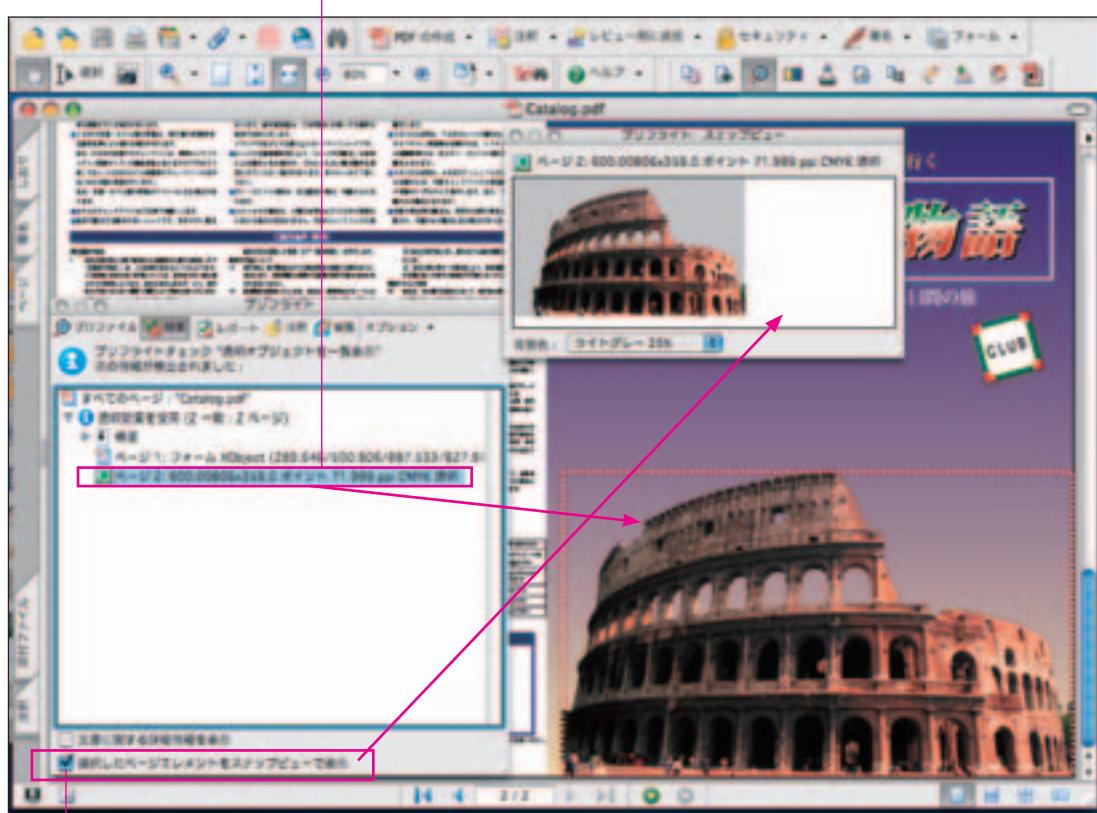
なにもハイライト表示しません。

・ラスタライズされた複雑な領域

次の欄の [分割・統合の設定] にしたがってラスタライズされる領

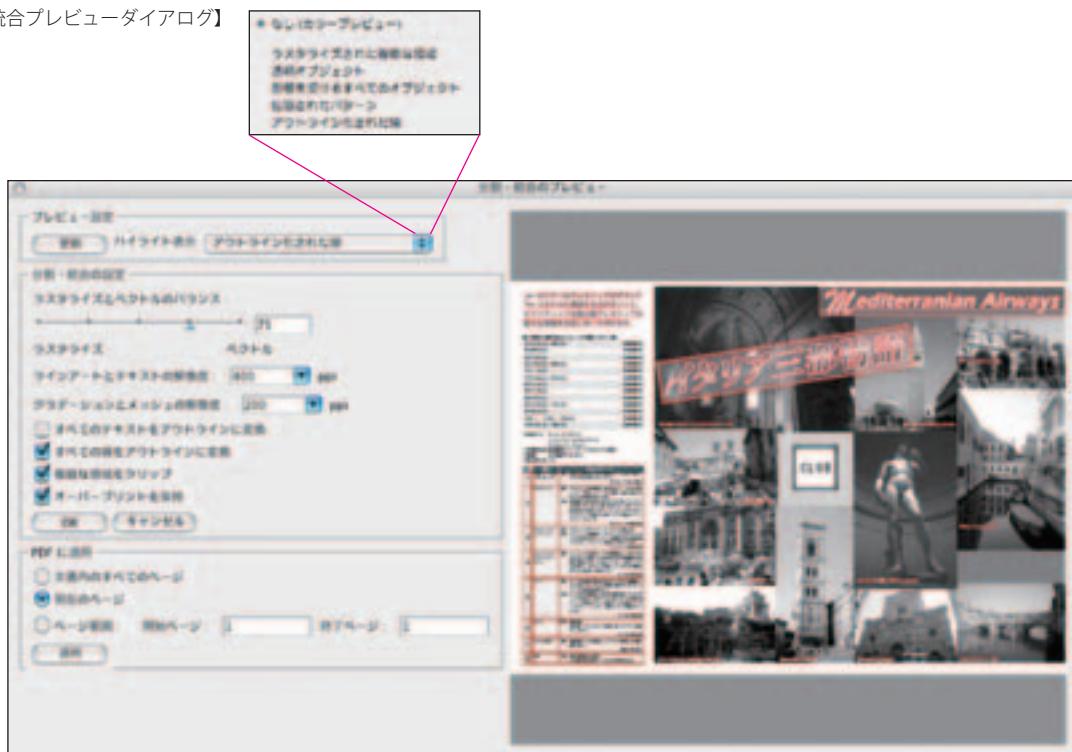
【ダブルクリックすると、対象となるオブジェクト  
が赤い点線で囲まれます。】

【透明のプリフライト結果】



チェックすると、別ウィンドウで対象となるオブジェクトが表示されます。

【透明の分割・統合プレビューダイアログ】



域をハイライト表示します。

#### ・透明オブジェクト

透明オブジェクトをハイライト表示します。

#### ・影響を受けるすべてのオブジェクト

透明オブジェクト、および透明オブジェクトと重なり合うオブジェクトをハイライト表示します。

#### ・拡張されたパターン

拡張されたパターンをハイライト表示します。「拡張されたパターン」というのは、Illustrator 9以降で作成されたパターンのことです。Illustrator 9以降で作成されたパターンの一部は透明を含みます。

#### ・アウトライン化された線

次の欄の「分割・統合の設定」にしたがってアウトライン化される線をハイライト表示します。

### 分割・統合の実行（2）分割・統合の設定

[分割・統合のプレビュー] ダイアログの「分割・統合の設定」欄では、分割・統合の条件を設定します。

#### ・ラスタライズとベクトルのバランス

スライダ、または入力ボックスに半角数値を入力して、ラスタライズデータとベクトルデータのバランスを設定します。スライダを左端にするか、入力ボックスの数値をゼロにするとすべての透明部分および影響を受ける部分がラスタライズされます。

スライダを右端にするか、数値を 100 にすると可能な限り、ベクトルデータを維持します。高精度出力用には、100 とすることが望まれますが、この場合、非常に多くのパスが生まれ、出力時に負担となることがあります。その場合は、数値を若干下げてください。

#### ・ラインアートとテキストの解像度

線画とフォントの解像度を設定します。プリンタ出力の場合は、600ppi 程度にしてください。イメージセッタなどの場合は、出力解像度の半分程度が目安です。2400ppi で出力する場合は、1200ppi としてください。

#### ・グラデーションとメッシュの解像度

グラデーションとメッシュ（網目）の解像度を設定します。Adobe InDesign、Adobe Illustrator で作成されたグラデーションと、Adobe Illustrator で作成されたメッシュは、透明を含む場合があります。この設定は、150 ~ 350ppi の間の値とします。グラデーションは、むやみに高い値を設定しても品質は向上しません。

#### ・すべてのテキストをアウトラインに変換

すべてのテキスト（フォント）をアウトラインに変換します。これは、フォントに透明処理が施されていたり、フォントに透明オブジェクトが重なっていたりする場合に利用します。

この場合、部分的にテキストがラスタライズされ、その結果として、ラスタライズされないフォントとの間で幅が変わることがあります。すべてのフォントをアウトラインに変換することで、それを防ぐことができます。この処理を行うと、プリンタ出力や画面表示では小さな文字は多少大きくなってしまうことがあります、高精度出力では影響ありません。

#### ・すべての線をアウトラインに変換

すべての線をアウトラインに変換します。透明なオブジェクトが重なる線の部分は、分割処理でアウトラインに変換されます。このオプションを選択すると、アートワークのすべての線幅が一定になります。

ます。ただし、このオプションを選択すると、低解像度プリントでプリントする場合細い線が若干太くなります。さらに、線の外観が変わることもあります。こうした場合は、オリジナルデータに戻つて、影響を受ける線を手動でアウトラインに変換した方が、よい結果が得られます。

#### ・複雑な領域をクリップ

ベクトルオブジェクトの一部のみをラスタライズする場合に、ステッチ（継ぎ目）の発生が軽減されます。この結果、ラスター化された部分とベクトル部分の境界が滑らかに表現されます。ただし、このオプションを選択すると、非常に複雑なクリッピングパスになる場合があり、処理に長い時間がかかり、プリント時にエラーが発生することがあります。

#### ・オーバープリントを保持

透明効果があるオブジェクトのオーバープリントが分割・拡張され、透明効果がないオブジェクトのオーバープリント指示は保持されます。このオプションは、色分解出力を行う場合、オーバープリントが分割・拡張される、またはオーバープリントが保持される場合のプリント結果同じにするのに有効です。このオプションを選択解除すると、すべてのオブジェクトのオーバープリントが分割・拡張されます。

コンポジットプリントを行う場合は、プリントドライバの設定で「コンポジットプリントでのオーバープリントを無視」を選択すると、すべてのオブジェクトのオーバープリントが分割・拡張されます。プリントドライバで「コンポジットプリントでのオーバープリントを無視」を選択解除すると、すべてのオブジェクトのオーバープリント指示が無視されます。

#### ・[OK] ボタン／[キャンセル] ボタン

[OK] ボタンをクリックすると、設定を維持してダイアログ閉じます。[キャンセル] ボタンをクリックすると、設定が破棄されてダイアログが閉じます。いずれのボタンをクリックした場合も、分割・統合は実行されません。分割・統合を実行するには、[PDF に適用] – [適用] ボタンをクリックする必要があります。

#### 分割・統合の実行（3）PDF に適用

[分割・統合のプレビュー] ダイアログ – [PDF に適用] 欄では、分割・統合を実行するページ範囲を指定します。[文書内のすべてのページ] を選択すると、すべてのページが対象となります。[現在のページ] を選択すると、プレビュー表示されているページのみが対象となります。[ページ範囲] を指定すると、指定した範囲のみが分割・統合の対象となります。

[適用] ボタンをクリックすると、以下のアラートが表示されます。[はい] ボタンをクリックすると、透明の分割・統合が実行されます。[いいえ] ボタンをクリックすると、[分割・統合のプレビュー] ダイアログに戻ります。[以後、このメッセージを表示しない] をチェックすると、次回から [適用] ボタンをクリックすると、直ちに透明の分割・統合が実行されます。

#### PDF/X-1a として入稿する場合のポイント

最近は、PDF/X-1a を入稿する機会が増えてきました。7.0 Pro のプリフライト機能では、PDF/X-1a の条件を満たしているかどうかをチェックする機能があります。これには、[プリフライト] ダイアログで [PDF/X-1a:2001 準拠]、または [PDF/X-1a:2003 準拠] を選択します。

両者の違いは、[PDF/X-1a:2001] のフォーマットが PDF 1.3 (Acrobat 4.0 互換) であるのに対して、[PDF/X-1a:2003] では PDF 1.4 (Acrobat 5.0 互換) であることです。また、PDF 1.4 からは透明がサポートされていますが、[PDF/X-1a:2001] と同様、[PDF/X-1a:2003] でも透明は禁止されています。

PDF/X-1a であるためのポイントと、7.0 Pro 上での対処方法は、以下の通りです。

#### ・すべての色が CMYK、または特色として定義されていること。

この条件が満たされていない場合は、[色を置換] ツールを利用して、適切な色空間に置き換えることができます。[色を置換] ツールについて、「セクション 3」「出力用プロファイルが添付されていない」。（17 ページ参照）を参照してください。

#### ・すべてのフォントが埋め込まれていること。

・太字、イタリック、下線などの文字修飾を使わないこと。

#### ・文字サイズが印刷条件に適していること。

これらのいずれの場合も、[TouchUp テキスト] 機能を利用して、修正することができます。[TouchUp テキスト] 機能については本書では説明しません。7.0 Pro のマニュアルを参照してください。

#### ・画像はすべて埋め込まれていること。

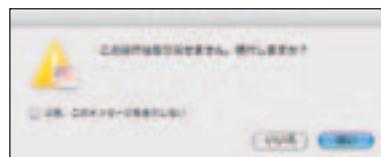
埋め込まれていない場合には、[TouchUp オブジェクト] 機能で埋め込むことができます。

#### ・透明効果を使ったオブジェクトは、すべて分割・統合処理がされていること。

これについては、本セクション「透明は出力前に必ず分割・統合する」（13 ページ）以下を参照してください。

#### ・ページサイズ、裁ち落としサイズが適切に設定されていること。

DTP ソフトでは、一般に裁ち落としサイズが設定できますが、一般的なアプリケーションのほとんどは、裁ち落としサイズが設定できません。したがって、一般アプリケーションから作成された PDF では、裁ち落としサイズがないのが普通です。この場合の処理については、「セクション 3」「裁ち落とし領域が設定されていない」。（20 ページ）を参照してください。



[PDF に適用] – [適用] ボタンをクリックすると表示されるダイアログ。

セクション2

## プリフライトでの問題点の抽出と解消

ここでは、一般的なワークフローで起こるさまざまな問題に対して、どのように対処すべきか、また、7.0 Pro でどのような対応が可能かを説明します。

【問題】出力用プロファイルが添付されていない。

#### ・何が問題か？

CMYK の値は絶対的なものではありません。デバイスが利用する色空間によって、具体的な CMYK の値は変化します。アプリケーションからの直接出力する場合は、実際の出力で問題があれば、個々のデータに戻って調整が可能です。しかし、PDF ではこのような作業は非常に難しく、ときには不可能です。このため、出力ターゲットなる色空間を定義したプロファイルの添付が必須になります。

ただし、PDF/X の場合は、出力が PDF/X の仕様に沿った運用が行われることが前提とされているため、出力用プロファイルは添付されません。

《原因》 PDF 作成時にプロファイルが選択されていません。

《解決法1》オリジナルデータに戻って、プロファイル添付のPDFを作成します。プロファイル添付のPDFを作成するには、「[プリント] ダイアログ上でプロファイルを選択します。

《解決法2》PDF上でプロファイルを添付します。7.0 Proで〔印刷工程ツールバー〕-〔色を置換〕をクリックします。〔色を置換ダイアログ〕が表示されます。

〔文書の色〕欄で、文書に含まれている色空間を選択します。文書がどのような色空間を持っているかは、〔出力プレビュー〕（5ページ「カラースペースのチェック」参照）で確認できます。色空間を選択し、〔アクション〕プルダウンメニューで処理を選択します。複数の色空間を持っている場合は、個々の色空間ごとに選択します。

[変換後のカラースペース] – [プロファイル] プルダウンメニューから、プロファイルを選択します。[ページを変換] 欄で、変換するページ範囲を指定します。

[変換オプション] 欄で [プロファイルをソースのカラースペースとして埋め込む]を選択します。[黒のオブジェクトを保持]をチェックすると、K 100%のオブジェクト、および墨文字は変換に関わらずK 100%が維持されます。[黒のオブジェクトを保持]をチェックしない場合、CMYKに分解され、Kが薄くなります。

[OK] ボタンをクリックすると、色変換が実行され、プロファイルが埋め込まれます。

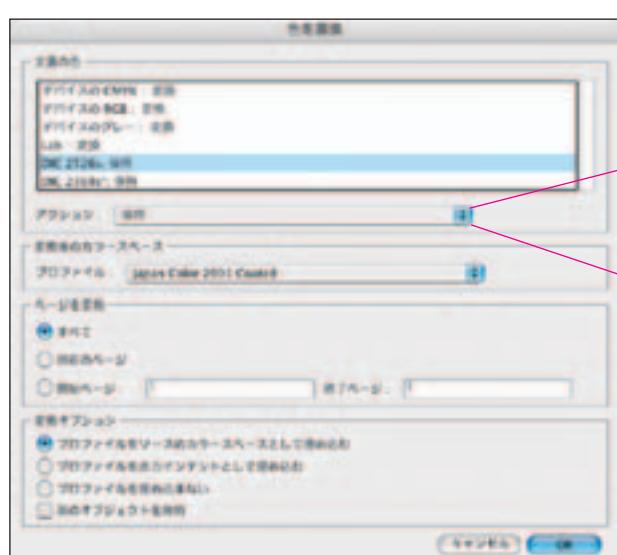
《注意》[色を置換] 機能を利用する場合、オリジナルデータから PDF 変換する際に、色変換を行っていないことが必要です。PDF 変換時に色変換を行い、さらに [色の置換] を行うと、二度にわたって色の変換を行うことになり、予想しない色の変化が起こることがあります。

また、オリジナルデータの色空間がRGBである場合は、CMYK変換によって部分的に退色が起こります。この退色は避けることができません。最終出力段階でのRGBからCMYKへの変換は、クライアントおよび制作部門と十分な合意のうえで行ってください。

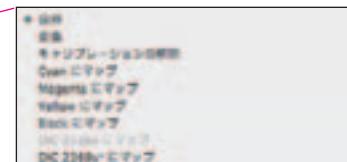
【問題】 誤った出力用プロファイルが添付されている。

#### ・何が問題か？

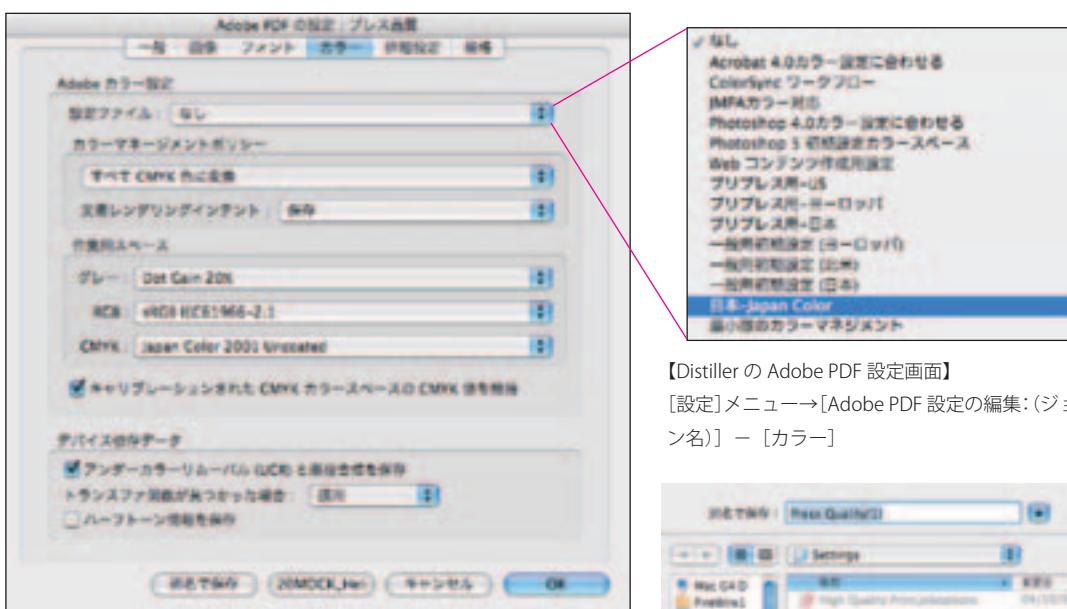
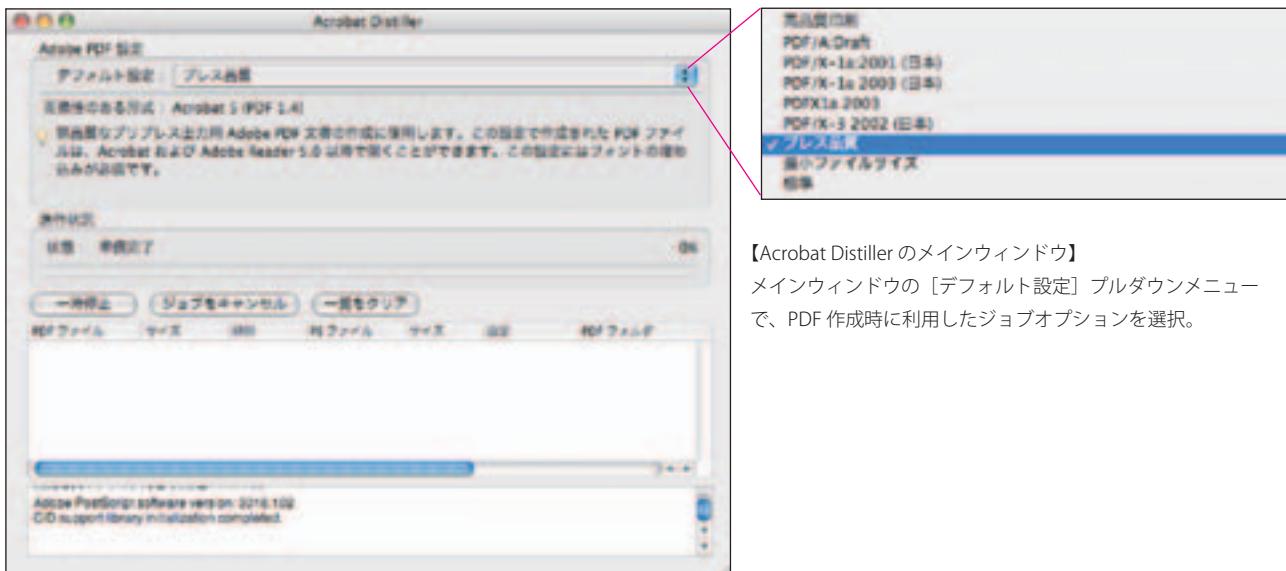
出力用プロファイルは、ある色空間から特定の色空間への変換時に適切な変換を行うためにデータを持ったファイルです。これが誤っていると、予想した色再現が行えないおそれがあります。ただし、PDF/X の場合は例外であることは、前項で説明したとおりです。



### 【色を置換ダイアログ】



## プリフライトでの問題点の抽出と解消



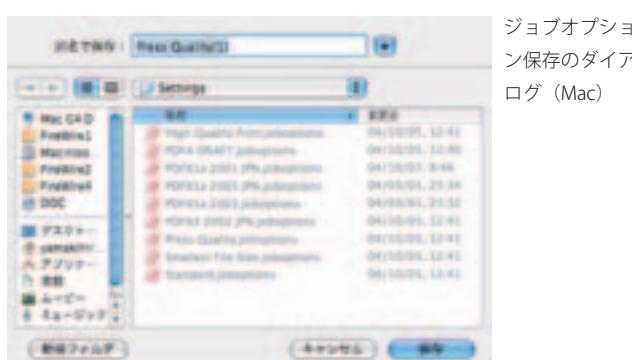
《原因》 PDF 作成時に誤ったプロファイルが選択されています。

《解決法 1》 オリジナルデータに戻って、正しいプロファイルを選択し、PDF を作成します。プロファイルを選択するには、Acrobat Distiller 上で以下の操作を行います。メインウィンドウの [デフォルト設定] プルダウンメニューで、PDF 作成時に利用したジョブオプションを選択します。

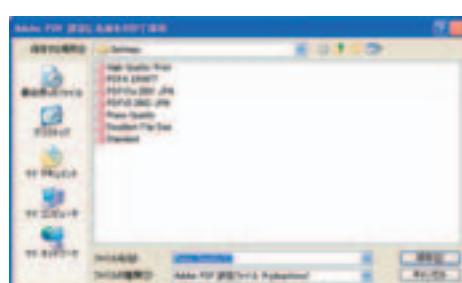
[設定] メニュー → [Adobe PDF 設定の編集] を選択します。[Adobe PDF 設定の編集: (ジョブオプション名)] が表示されます。

[設定ファイル] プルダウンメニューでターゲットカラーを選択します。[別名で保存] ボタンをクリックします。Mac 版では、ダイアログ上部にファイル保存のダイアログが表示されます。[別名で保存] 欄に適当な名称を入力し、[保存ボタン] をクリックします。Windows 版では、[名前を付けて保存] ボタンをクリックすると、[Adobe PDF 設定に名前を付けて保存] ダイアログが表示されます。[ファイル] 名欄に適当な名称を入力し、[保存] ボタンをクリックします。

新しいジョブオプションの作成後に、アプリケーションから新規に



[Adobe PDF 設定に名前を付けて保存] ダイアログ (Windows)



作成されたジョブオプションを選択し、PDF を作成します。

《解決法 2》 PDF 上でプロファイルを変更します。7.0 Pro で [印刷工程ツールバー] → [色を置換] をクリックします。[色を置換ダイアログ] が表示されます。[文書の色] 欄で [デバイスの CMYK]

が【変換】になっていることを確認します。もし、【保持】などの表現になっている場合は、【アクション】プルダウンメニューで【変換】を選択します。

【変換後のカラースペース】→【プロファイル】プルダウンメニューで正しいプロファイルを選択し、【OK】ボタンをクリックします。

### 【問題】一部にRGBの画像が混在している。

#### ・何が問題か？

CMYKベースのデータの一部にRGBの画像が混在していると、RIPや出力条件によって、どのような色に変化するかわかりません。遅くとも出力直前には、CMYKに変換しておく必要があります。

《原因》画像の色変換処理が行われていません。

《解決法1》オリジナルの画像に戻って、色変換を行った後、レイアウトソフトに貼りなおします。

《解決法2》PDF作成時に色変換を行います。PDF作成時に色変換を行うには、Acrobat Distiller上で以下の操作を行います。メイン

ウィンドウの【デフォルト設定】プルダウンメニューで、PDF作成時に利用したジョブオプションを選択します。

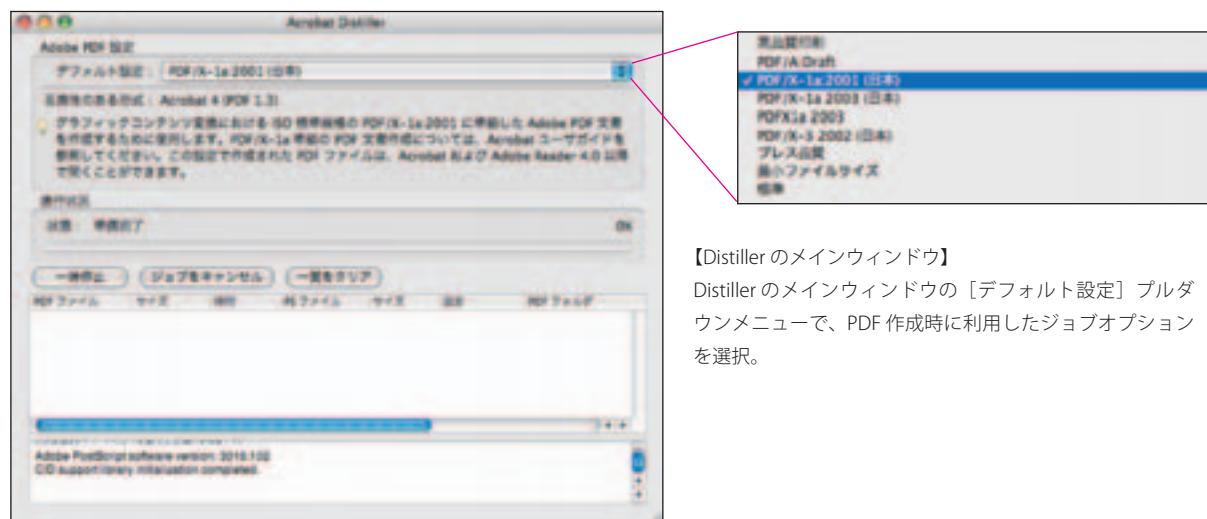
【設定】メニュー→【Adobe PDF設定の編集】を選択します。【Adobe PDF設定の編集】:(ジョブオプション名)が表示されます。

【カラーマネージメントポリシー】欄のプルダウンメニューから【すべてCMYKに変換】を選択します。【別名で保存】ボタンをクリックし、ジョブオプションを保存します。保存が終わると、Distillerのメインウィンドウに戻ります。

ジョブオプションの作成後に、アプリケーションから新規に作成されたジョブオプションを選択し、PDFを作成します。

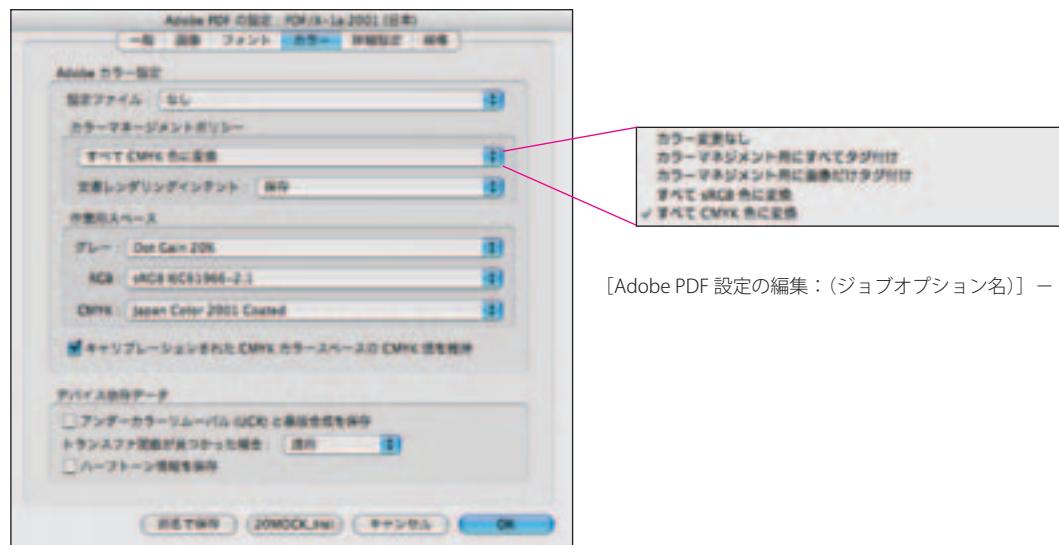
《参考》PDF作成時にCMYK変換する機能を利用すると、オフィスアプリケーションなど一般的なアプリケーションからも、印刷用に最適化されたPDFを作成することができます(18ページ「解決法1」参照)。

《解決法3》PDF上で色変換を行います(17ページ「解決法2」参照)。PDF上で色変換を行うには、7.0 Proで【印刷工程ツールバー】→



#### 【Distillerのメインウィンドウ】

Distillerのメインウィンドウの【デフォルト設定】プルダウンメニューで、PDF作成時に利用したジョブオプションを選択。



【Adobe PDF設定の編集】:(ジョブオプション名) → [カラー]

[色を置換] をクリックします。[色を置換ダイアログ] が表示されます。[文書の色] で [デバイスのRGB] を選択します。[アクション] プルダウンメニューで [変換] を選択します。

[変換後のカラースペース] – [プロファイル] プルダウンメニューでプロファイルを選択します。[変換オプション] – [黒のオブジェクトを維持] をチェックします。このオプションをチェックすると、R=0,G=0,B=0 である RGB の黒が CMYK の K=100 に変換されます。墨文字のほか、一般的の黒（ベタ）が対象になります。これをチェックしないと、CMYK に分解されてしまいます。

[OK] ボタンをクリックすると、RGB オブジェクトは設定した CMYK に変換されます。

#### 【問題】印刷に使わない特色が設定されている。

##### ・何が問題か？

カラー印刷は、通常 CMYK の四色で行います。四色を超える印刷を行う場合は、当然コストが膨らみます。このため、四色超の印刷物作成では、制作部門と出力部門の間のだけでは済みません。印刷部門との間でも、納期、コストに関しても合意が必要になります。しかし、実際には、不注意や印刷への無理解から、四色超の指定が行われたデータが、部門間の合意なしに入稿されることがあります。この場合、出力部門、印刷部門としては、特色を四色に変換、収束させるしかありません。

《原因》オリジナルデータで特色を使っています。

《解決法1》オリジナルデータに戻って、特色をプロセスカラーに変換します。

《解決法2》PDF 上で特色をプロセスカラーに変換します。7.0 Pro 上での作業は特色の検出と、プロセスカラーへの変換の2つの手順で行います。

##### ・特色的検出（1）[出力プレビュー] ツールの利用

特色を検出するには、[出力プレビュー] ツールを利用する方法と、[プリフライト] ツールを利用する方法の2つがあります。チラシなどの端物や少數ページのものなら [出力プレビュー] が、簡単で便利です。ページの多いものでは [プリフライト] で一括して検索するのがよいでしょう。

[出力プレビュー] ツールを利用するには、[印刷ツールバー] – [出力プレビュー] をクリックします。[出力プレビュー] ダイアログが表示されます。

[表示プルダウンメニュー] から [特色] を選択します。特色を使ったオブジェクトのみが表示されます。ページが複数の場合、[次のページ] ボタンなどでページ移動を行います。移動したページ上で特色を使ったオブジェクトのみが表示されます。

[出力プレビュー] の詳細については、本書の「プレビュー」「出力プレビューの使い方」（5ページ）を参照してください。

##### ・特色的検出（2）[プリフライト] ツールの利用

[プリフライト] ツールを利用するには、[印刷工程ツールバー] –

[プリフライト] をクリックします。[プリフライト] ダイアログが表示されます。[現在のPDFをプリフライトするためのプロファイルを選択] 欄で [特色オブジェクトを一覧表示] を選択します。

[実行] ボタンをクリックします。プリフライト結果が表示されます。また、ダイアログを拡大することもできます。項目をクリックすると、[プリフライト：スナップビュー] に該当のオブジェクトが赤い点線で囲まれます。ダイアログ下端の [選択したページエレメントをスナップビューで表示] をチェックすると、個々のオブジェクトをサムネールで表示することができます。

プリフライト結果は、別ファイルでレポートとしたり、当該のPDFの注釈としたりすることもできます。これらの機能については、「プリフライト結果を注釈として書き出す」（9ページ）、「プリフライト結果を外部ファイルとして書き出す」（9ページ）を参照してください。

[プリフライト] の詳細については、本書の「プレビュー」「プリフライト機能の使い方」（8ページ）以下を参照してください。

##### ・特色的プロセスカラーへの変換

特色をプロセスカラーに変換するには、[インキ] ボタンをクリックします。[インキ] ダイアログが表示されます。ダイアログの下の方にある [すべてのスポットカラーをプロセスカラーに変換] をチェックします。[OK] ボタンをクリックします。特色がプロセスカラーに変換され、[プレビュー] ダイアログに戻ります。

[インキ] ツールの詳細については、本書「プレビュー」「濃度値、トラップの順序などを設定できる [インキ] ツール」（7ページ）を参照してください。

#### 【問題】裁ち落とし領域が設定されていない。

##### ・何が問題か？

裁ち落とし領域は、断裁時のズレに備えた予備の領域です。これがないと、写真や帯などが裁ち落としの設定になっている場合に、紙白が出てしまうおそれがあります。

《原因1》オリジナルデータが、PostScript 出力を前提としたレイアウトソフト（いわゆる DTP アプリケーション）で作成されている場合は、裁ち落とし領域の設定が誤っています。《解決法1》《解決法2》で対処してください。

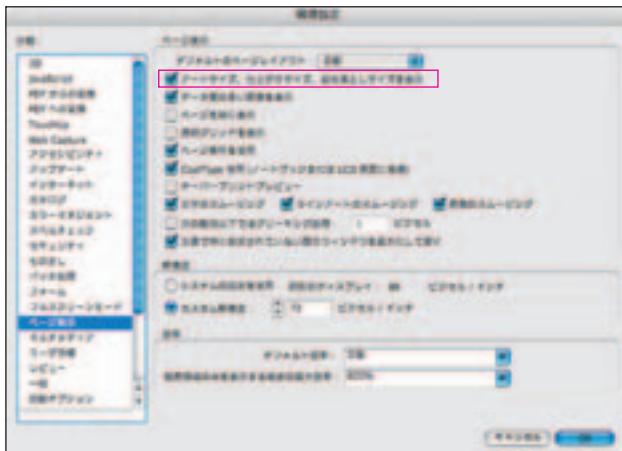
《原因2》オリジナルデータの作成がいわゆる DTP アプリケーションでなく、一般的なアプリケーションである場合は、裁ち落とし領域が設定できません。《解決法2》で対処してください。

《解決法1》オリジナルデータに戻って、裁ち落とし領域を設定します。裁ち落とし領域の幅は一般に3ミリですが、事前に印刷、断裁を担当する部門に確認してください。ここでは3ミリにするものとして、以下の説明を行います。

《解決法2》PDF 上で裁ち落とし領域を設定します。これには、7.0 Pro の [ページのトリミング] ツールを使います。[ページのトリ

### 【環境設定ダイアログ（Mac）】

[Acrobat] メニュー → [環境設定] – [ページ表示] で、[アートサイズ、仕上がりサイズ、裁ち落としサイズを表示] をチェック。



ミング]ツールを使う前に、環境設定を行います。これは、[ページのトリミング]ツールを利用しやすくするためです。

#### ・環境設定の変更

[Acrobat] メニュー (Mac 版。Windows 版では [編集] メニュー) → [環境設定] を選択します。[環境設定] ダイアログが表示されます。[分類] パネルで [ページ表示] を選択します。[アートサイズ、仕上がりサイズ、裁ち落としサイズを表示] をチェックし、[OK] ボタンをクリックします。

[印刷工程ツールバー] – [ページのトリミング] をクリックします。[ページのトリミング] ダイアログが表示されます (次ページ上段参照)。PDF は、以下の四つのサイズを持つことができるようになっています。

トリミング…PDF のメディアサイズ

仕上がり…いわゆるページサイズ

裁ち落とし…仕上がりサイズに裁ち落としサイズを加えたもの

アート…文字、画像などが配置されている領域です。

[ページのトリミング] ダイアログは、この四つのサイズの値を個別に設定するためのものです。四つのラジオボタンのいずれかを選択し、[余白の制御] 欄に数値を入力することで、それぞれの値を設定、変更できます。

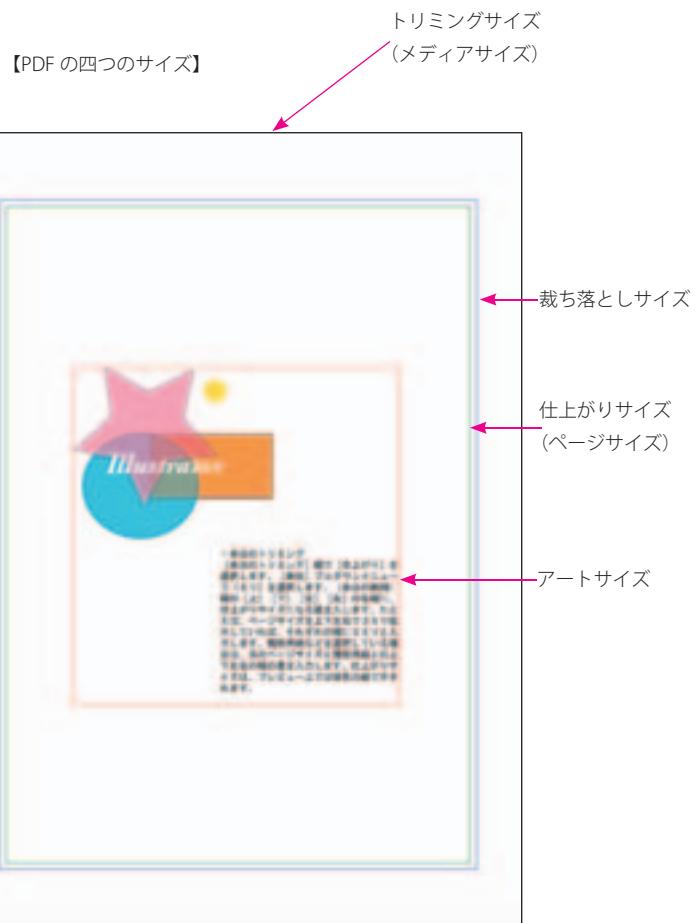
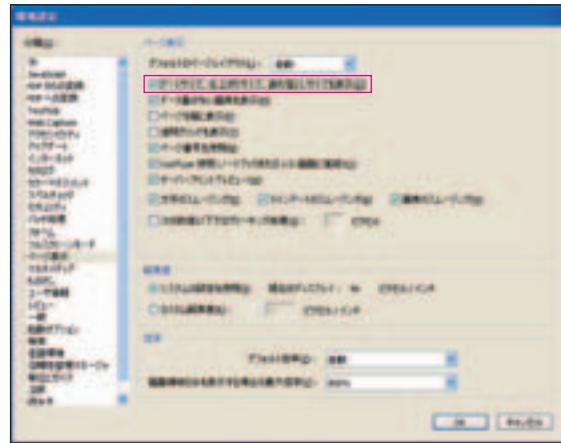
#### ・ページサイズを変更

[ページサイズを変更] 欄で、現在のページサイズよりも大きい用紙サイズを設定します。[固定サイズ] を選択すると、[ページサイズ] プルダウンメニューから規格用紙を選択できます。[カスタム] を選択すると、任意の用紙サイズを設定できます。

裁ち落とし領域を設定するだけの場合には、現在のページサイズよりも 3 ミリ大きくします。トンボなどを設定する場合には、一回り大きな規格用紙を選択してください。たとえば、ページサイズ (仕

### 【環境設定ダイアログ（Windows）】

[編集] メニュー → [環境設定] – [ページ表示] で、[アートサイズ、仕上がりサイズ、裁ち落としサイズを表示] をチェック。



上がりサイズ) が A4 であれば、B4 を選択します。[ページサイズを変更] を設定すると、変更後のイメージがプレビューで表示されます。

#### ・余白のトリミング

[余白のトリミング] 欄で [仕上がり] を選択します。[単位] プルダウンメニューで [ミリ] を選択します。[余白の制御] 欄の [上] / [下] / [左] / [右] の各欄に、仕上がりサイズになる値を入力します。いずれの値も、トリミングサイズ (メディアサイズ) から差し引くべき数

## 【ページのトリミングダイアログ】



した数値よりも、3ミリ少ない数値を入力します。トリミングサイズがB4で、仕上がりサイズがA4の場合、[上] [下] の値は30.5ミリ、[左] [右] の値は20.5ミリです。裁ち落としサイズは、プレビュー上では紺色の線で示されます。

## ・ページ範囲

[ページ範囲] 欄で裁ち落としを設定するページを指定します。[選択したページ] を選択すると、プレビュー表示されているページのみが用紙サイズが拡大します。[すべて]とページ範囲の指定は、[適用先] プルダウンメニューとの併用になります。たとえば [すべて] を選択して、[奇数ページのみ] を選択すると、奇数ページのみが用紙サイズが拡大します。

## ・実行

[OK] ボタンをクリックすると、ダイアログが閉じ、各設定がページ上に反映されます。仕上がりサイズは紺色の線、裁ち落としサイズは緑色の線でページ上にも表示されます。

## 【問題】PDFにトンボを付けたい。

## ・何が問題か？

PDFは仕上がりサイズで作成されるのが一般的です。制作途中では、仕上がりサイズ、裁ち落としサイズなどをイメージで確認したい場合があります。

《原因》 PDFが仕上がりサイズで作成されています

《解決法1》 オリジナルデータを作成したアプリケーションに戻って、トンボ付きのPDFを作成します。通常のトンボ付き出力の設定を行い、プリンタドライバとしてAdobe PDFを選択します。

《解決法2》 PDFにトンボを付けます。最初に、前述「裁ち落とし領域が設定されていない」での説明にしたがって、ページサイズの

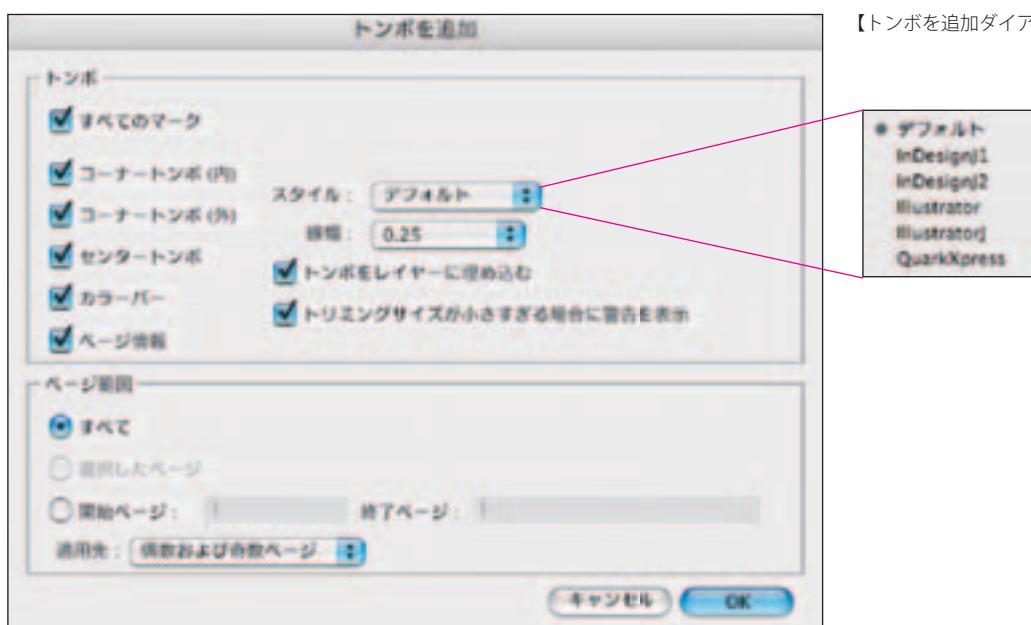
値を入力します。

たとえば、ページサイズを上下左右で3ミリ拡大していれば、それぞれの欄に3ミリと入力します。規格用紙などを選択している場合は、元のページサイズと規格用紙との上下左右の幅の差の半分の値を入力します。トリミングサイズがB4で、仕上がりサイズ（ページサイズ）がA4の場合、[上] [下] の値は33.5ミリ、[左] [右] の値は23.5ミリです。仕上がりサイズは、プレビュー上では緑色の線で示されます。

次いで、[余白のトリミング] 欄で「裁ち落とし」を選択します。[余白の制御] 欄の [上] [下] [左] [右] の各欄に、裁ち落としの幅を入力します。ページサイズを3ミリ拡大している場合は、上下左右とも0（ゼロ）のままにします。

規格用紙などを選択している場合は、仕上がりサイズの場合に入力

## 【トンボを追加ダイアログ】



拡大、裁ち落とし領域を設定してください。その後に、[印刷工程ツールバー] – [トンボを追加] をクリックします。[トンボを追加] ダイアログが表示されます（全ページ下段参照）。

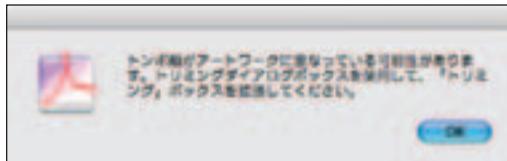
[すべてのマーク] をチェックします。すべてのチェックボックスがチェックされます。不要な項目は個々にチェックボックスをチェックしてはずしてください。[スタイル] プルダウンメニューからトンボのスタイルを選択します。

[トンボをレイヤーに埋め込む] をチェックすると、トンボは文書を構成する要素とは別のレイヤーに書き込まれます。レイヤーは表示、非表示を切り替えられるので、トンボを追加後も、トンボなしで出力／表示ができます。

[トリミングサイズが小さすぎる場合に警告を表示] をチェックすると、PDFのサイズ（メディアサイズ）が小さいためにマークのいずれかが表示できない場合に、[トンボを追加] ダイアログの[OK] ボタンをクリック後、警告のダイアログが表示されます。警告ダイアログの[OK] ボタンをクリックすると、トンボ等が追加されます。

[ページ範囲] 欄でトンボを設定するページを指定します。[選択したページ] を選択すると、プレビュー表示されているページのみに

#### 【トンボを追加するときに表示される警告】



トンボ等が追加されます。[すべて] とページ範囲の指定は、[適用先] プルダウンメニューとの併用になります。たとえば [すべて] を選択して、[奇数ページのみ] を選択すると、奇数ページのみが用紙サイズが拡大します。[OK] ボタンをクリックすると、トンボなどのマークが追加されます。

#### 【問題】スムーズシェードをグラデーションに変換したい。

##### ・何が問題か？

スムーズシェードは、無階調のグラデーションです。一般的なグラデーションは、複数の濃度の色を無数に重ねて作成されますが、スムーズシェードでは、一つのオブジェクトにして構成されています。スムーズシェードを出力する場合には、一般的なグラデーションと同様の複数の階調を持つグラデーションに変換する必要があります。この際、RIPによっては出力に非常に時間がかかったり、出力エラーが起つたりする場合もあります。

《原因》 Adobe Illustrator 9 以降等のデータがネイティブで使われています

《解決法 1》スムーズシェードを利用しているオブジェクトを EPS として書き出し、レイアウトソフトに貼りなおします。レイアウトソフト上で作成されたスムーズシェードは、グラデーションに変換します。

《解決法 2》 PDF 上でグラデーションに変換します。7.0 Pro では、スムーズシェードの検出と、グラデーションへの変換の 2つの手順で行います。

スムーズシェードの検出には、2つの方法が利用できます。1つは、[出力プレビュー] ツール、もう1つは [プリフライト] ツールです。前者は、ページ上ですばやく確認できるので端物や少少数ページのデータに向いています。後者は、一括して検出できるので、大量のページデータを処理したい場合に向いています。

- ・スムーズシェードの検出 （1）[出力プレビュー] ツールの利用  
[印刷工程ツールバー] – [出力プレビュー] をクリックします。[出力プレビュー] ダイアログが表示されます。[表示] プルダウンメニューから [スムーズシェード] を選択します。スムーズシェードのオブジェクトのみが表示されます。[出力プレビュー] の詳細については、本書「プレビュー」「出力プレビューの使い方」（5ページ）を参照してください。

- ・スムーズシェードの検出 （2）[プリフライト] ツールの利用  
[印刷工程ツールバー] – [プリフライト] をクリックします。[プリフライト] ダイアログが表示されます。[スムーズシェード] を一覧表示] を選択し、[実行] ボタンをクリックします。[プリフライト] の詳細については、本書「プレビュー」「プリフライト機能の使い方」（8ページ）を参照してください。

##### ・グラデーションへの変更

スムーズシェードをグラデーションに変更するには、[透明部分の分割・統合] ツールを利用します。スムーズシェードも透明と同じ原理を利用しているからです。[印刷工程ツールバー] – [透明部分の分割・統合] をクリックします。[透明部分の分割・統合] ダイアログが表示されます。このダイアログの使い方については、「セクション 1」「分割・統合の実行（1）プレビュー設定」（14ページ）を参照してください。

#### 【問題】ヘアラインが散見される。検出して、修正したい。

##### ・何が問題か？

0.25 ポイント未満の線は、プリンタでは出力できても、高精度出力機では出力されないことがあります。また、出力できた場合も、印刷で再現されない場合があります。

《原因》 原因は、いくつかあります。オペレータが不注意で線幅を 0.25 ポイント以下に設定してしまうこともあります。最もありがちなのは、オリジナルデータをレイアウトソフト上で縮小した場合です。また、オフィスアプリケーションなどが標準で用意している線種（ことに飾り罫）の中には、最初から 0.25 ポイント未満のものもあります。

《解決法 1》オリジナルデータに戻って、線幅を設定し直します。飾り罫などの場合は、線種を変えます。その後に、PDF 変換を行います。

《解決法2》PDF上で0.25ポイント未満の線を、0.25ポイント以上に変更します。7.0 Pro上での作業は0.25ポイント未満の線の検出と、0.25ポイント以上の線への変換の2つの手順で行います。検出するには、「[プリフライト]ツールを利用します。

#### ・ヘアラインの検出

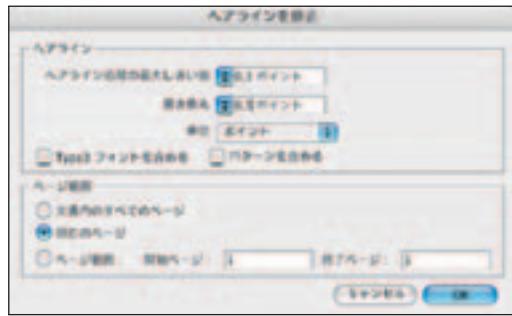
[印刷工程ツールバー] – [プリフライト]をクリックします。[プリフライト]ダイアログが表示されます。[現在のPDFをプリフライトするためのプロファイルを選択]欄で[ヘアラインを一覧表示]を選択します。[実行]ボタンをクリックすると、ヘアラインが一覧で表示されます。[プリフライト]の詳細については、本書レビュー「プリフライト機能の使い方」(8ページ)を参照してください。

#### ・ヘアラインの修正

ヘアラインは、[TouchUpオブジェクト]ツールで個々に変換することができます。これについてはAcrobatのマニュアルを参照してください。ここでは、[ヘアラインを修正]ツールを利用します。[印刷工程ツールバー] – [ヘアラインを修正]をクリックします。[ヘアラインを修正]ダイアログが表示されます。

[ヘアライン] – [ヘアライン処理の最大しきい値]には、変更すべきヘアラインの幅を設定します。[置き換え]には、変更後の線の幅を設定します。[単位]プルダウンメニューで線幅の単位を変更できます。

【ヘアラインを修正ダイアログ】



「Type3フォント」はスクリーンフォントの一種で、ヒント情報を開示しないType1フォントです。日本語フォントではほとんどありませんが、古い欧文フォントではこのフォーマットが使われていることがあります。ヒント情報が開示されていないので、縮小するとアウトラインを取った字形のようにヘアラインを生ずることがあります。

「パターン」はベクトルデータで構成されたオブジェクトのことです。ベクトルデータの縮小によるヘアラインを修正します。

[ページ範囲]で、線幅を変更するページ範囲を指定します。[OK]ボタンをクリックすると、線幅が変更されます。

#### 【問題】PDF/Xに変換したい。

#### ・何が問題か？

PDF/Xは、一定の仕様を満たさなければなりません。基本的には、制作したアプリケーションからPDF/X仕様のPDFとして変換する必要があります。しかし、オフセット印刷で印刷できる仕様、精度を持っていれば、7.0 Pro上でPDF/Xに変換できる可能性があります。

《原因》PDF変換時に、PDF/Xの設定(joboptions)が選ばれていません。または、Acrobat以外のソフトでPDFに変換しています。《解決法1》オリジナルデータに戻って、PDF/Xに変換します。これについては、7.0 Proのマニュアルを参照してください。PDF/Xの仕様については、本書セクション1「PDF/X-1aとして入稿する場合のポイント」も参照してください。

《解決法2》PDF上でPDF/Xに変換します。PDF/Xへの変換は、次の3つのステップで行います。

- (1) PDF/X仕様となっていない部分の検出
- (2) PDF/X仕様となっていない部分の修正
- (3) PDF/Xへの変換

#### ・PDF/X仕様となっていない部分の検出

[印刷工程ツールバー] – [プリフライト]をクリックします。[プリフライト]ダイアログが表示されます。[現在のPDFをプリフライトするためのプロファイルを選択]欄で[PDF/X-1a:2001準拠]を選択します。[実行]ボタンをクリックします。プリフライト結果の一覧が表示されます。

この一覧で、7.0 Proで修正できない問題点がある場合は、PDF/Xへの変換はできません。オリジナルデータを作成したアプリケーションに戻って、修正してください。一覧のすべてが7.0 Pro上で修正可能な場合、すべてを修正します。

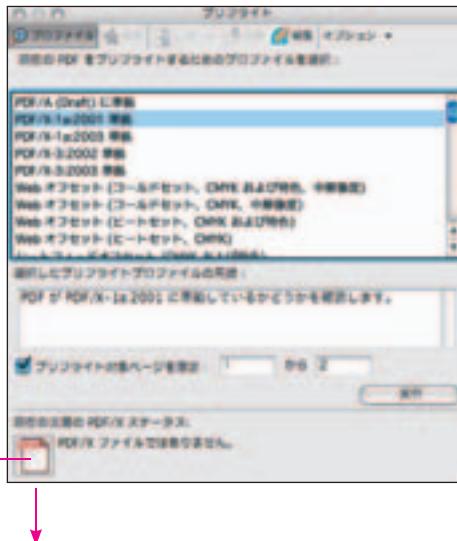
#### ・PDF/Xへの変換

[プリフライト]ダイアログで[プロファイル]タブをクリックします。ダイアログ下端の[現在の文書のPDF/Xステータス]の下にある\*\*PDF/Xアイコン\*\*をクリックします。[プリフライト:PDF/Xに変換]ダイアログが表示されます。

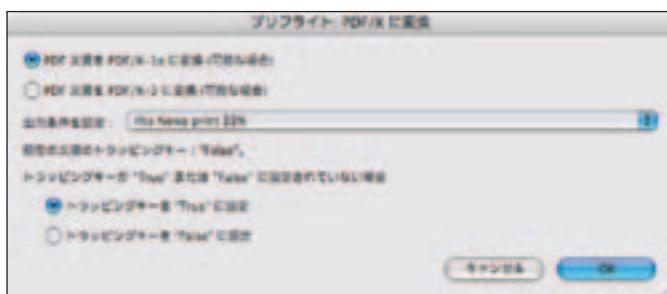
このダイアログの設定は、出力部門、印刷部門と相談して決めてください。[PDF文書をPDF/X-1aに変換(可能な場合)]と[PDF文書をPDF/X-3に変換(可能な場合)]は、いずれか一方のみを選択できます。

[出力条件を設定]プルダウンメニューで、適切な条件を選択してください。トランピングキーは、一般的には"True"を選択しますが、これも出力部門、印刷部門と相談する必要があります。[OK]ボタンをクリックすると、PDFに問題がなければPDF/Xに変換されます。

【プリフライトダイアログ】



クリック



【プリフライト：PDF/X に変換ダイアログ】

## セクション3

## プリフライトのコントロール

ここでは、プリフライト機能をより発展的に利用するための情報を紹介します。

## PDF/X プリフライトプロファイルに解像度チェックを追加する

PDF/X プリフライトプロファイルでは、画像の解像度をチェックするようになっていません。そこで、解像度が 300ppi 未満である画像をチェックするように、プロファイルをカスタマイズします。プロファイルをカスタマイズするプロセスは、PDF/X プロファイルの複製の作成と、解像度チェックの追加の 2 ステップで行います。

## ・ PDF/X プロファイルの複製の作成

[プリフライト] ダイアログを開き、[現在の PDF をプリフライトするためのプロファイルを選択] 欄で [PDF/X-1a:2001 準拠] を選択し、[編集] タブをクリックします。

[プリフライト：プロファイルを編集] ダイアログが表示されます。ダイアログ左下端の[選択したプロファイルを複製]ボタンをクリックします。

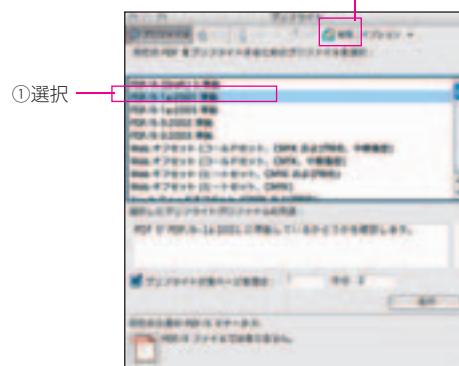
[プリフライト：プロファイルを編集] ダイアログに、新しいプロファイルが作成されます。[名前] [用途] は、任意のものに変更できます。ここでは [名前] を [PDF/X-1a:2001 準拠 解像度をチェック] とします。また、[用途] 欄に「解像度 300ppi 未満の画像を検出します。」と書き加えます。

## ・ 解像度チェックの追加

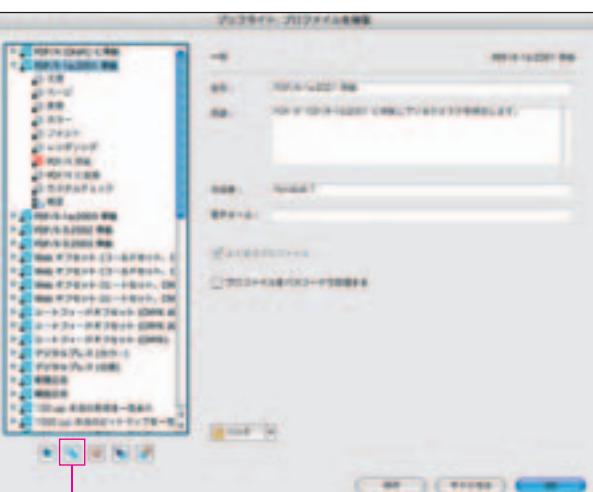
左側のパネルの [PDF/X-1a:2001 準拠 解像度をチェック] — [画像] をクリックします。[カラーおよびグレースケール画像の解像度]

## 【プロファイルのカスタマイズ手順】

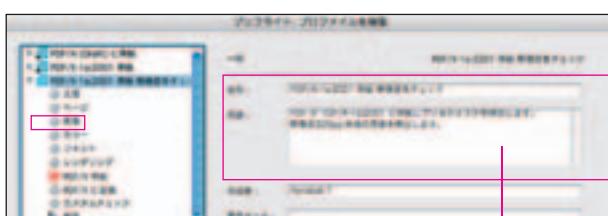
②クリック



①選択

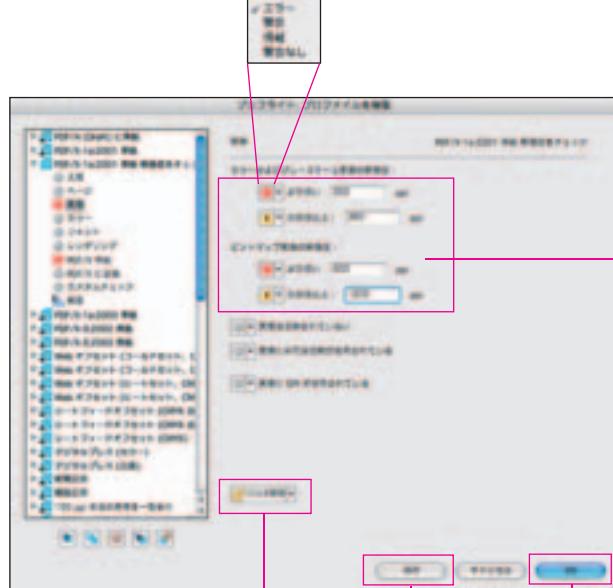


③クリック



④ [名前] [用途] を編集

⑤解像度を設定



⑥ [ロック] に設定

⑦クリック

⑧クリック

欄の2行ある設定欄の1行目右側プルダウンメニューで「エラー」を選択します。右側の入力欄には「300ppi」と入力します。2行目は必要があれば設定します。ここではプルダウンメニューで「警告」、入力欄は「360ppi」とします。

【ピットマップ画像の解像度】は、モノクロ（いわゆる2値）画像のことです。必要があれば設定します。モノクロ画像を使う場合は、600～1200ppiの間で設定します。

【ロック解除】と表示されているプルダウンメニューから「ロック」を選択します。「ロック」は「文書」～「概要」のすべての項目で設定してください。誤って変更されると、PDF/X仕様でないPDFを出力に回すことになります。

【保存】ボタンをクリックします。これで、解像度チェックを行うプロファイルが作成されました。【保存】ボタンをクリックすると、新しいプロファイルが保存されます。ダイアログは閉じません。【保存】ボタンをクリックする前に、「キャンセル」ボタンをクリックすると編集内容は破棄されます。【OK】ボタンをクリックすると、新しいプロファイルが保存され、「プリフライト：プロファイルを編集」ダイアログが閉じます。

**プリフライトプロファイルを各部門、各マシンで統一したい**  
プリフライトプロファイルは、ファイルとして書き出すことができます。また、これを他のマシン上の7.0 Proに取り込むことができます。

#### ・プリフライトプロファイルの書き出し

プロファイルを書き出すには、「プリフライト：プロファイルを編集」ダイアログ（前項参照）を開き、書き出したいプロファイルを選択して、左下の「プリフライトプロファイルを書き出し」ボタンをクリックします。

Mac版では「保存」ダイアログが表示されます。【場所】プルダウンメニューで保存フォルダを選択し、【保存】ボタンをクリックします。プリフライトプロファイルがファイルとして保存されます。Windows版では「プリフライトプロファイルを書き出し」ダイアログが表示されます。保存フォルダを選択し、【保存】ボタンをクリックします。プリフライトプロファイルがファイルとして保存されます。

#### ・プリフライトプロファイルの取り込み

プロファイルを読み込むには、「プリフライト：プロファイルを編集」ダイアログを開き、左下の「プリフライトプロファイルを取り込み」ボタンをクリックします。

Mac版では「開く」ダイアログが表示されます。Windows版では「プリフライトプロファイルを取り込み」ダイアログが表示されます。ファイルを保存したフォルダを選択し、プロファイルのファイルを選択して、「開く」ボタンをクリックします。

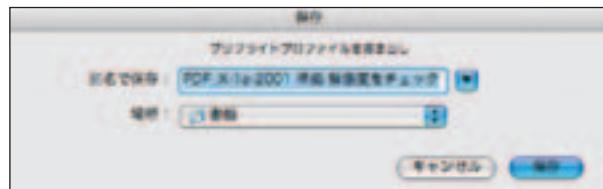
ダイアログ下部に取り込みの進行を示すグラフが表示され、グラフが右端まで来るとファイルが取り込まれます。「プリフライト：プロファイルを編集」ダイアログの左側のパネルに新しいプロファイルが表示されます。

【プリフライト：プロファイルを編集ダイアログ】

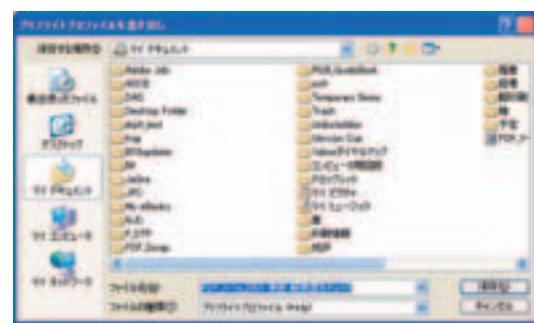


[プリフライトプロファイルを取り込み] ボタン  
[プリフライトプロファイルを書き出し] ボタン

【保存ダイアログ (Mac版)】



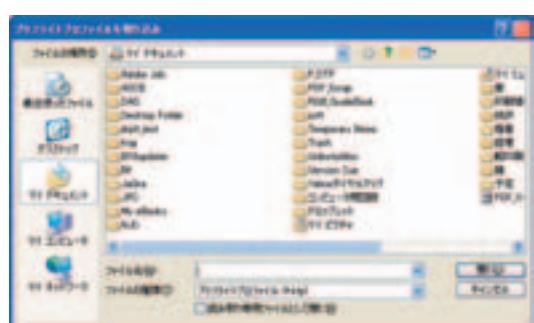
【プリフライトプロファイルを書き出しダイアログ (Windows版)】



【開くダイアログ (Mac版)】



【プリフライトプロファイルを取り込みダイアログ (Windows版)】



### 複数の PDF を一括してプリフライトしたい

7.0 Pro では、ドロップレットという機能で、特定のフォルダにある PDF を一括してプリフライトすることができます。この機能を利用するには、まず、ドロップレットファイルを作成します。その後に、プリフライトしたい PDF が格納されたフォルダをドロップレットファイルにドラッグ & ドロップします。

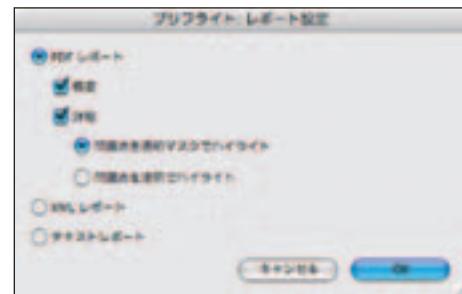
#### ・ドロップレットファイルの作成

ドロップレットファイルを作成するには、[プリフライト] ダイアログを開きます。[オプション] プルダウンメニューから [プリフライトドロップを作成] を選択します。[プリフライト: ドロップレット設定] ダイアログが表示されます。

[実行するプロファイル] プルダウンメニューで、プリフライトプロファイルを選択します。

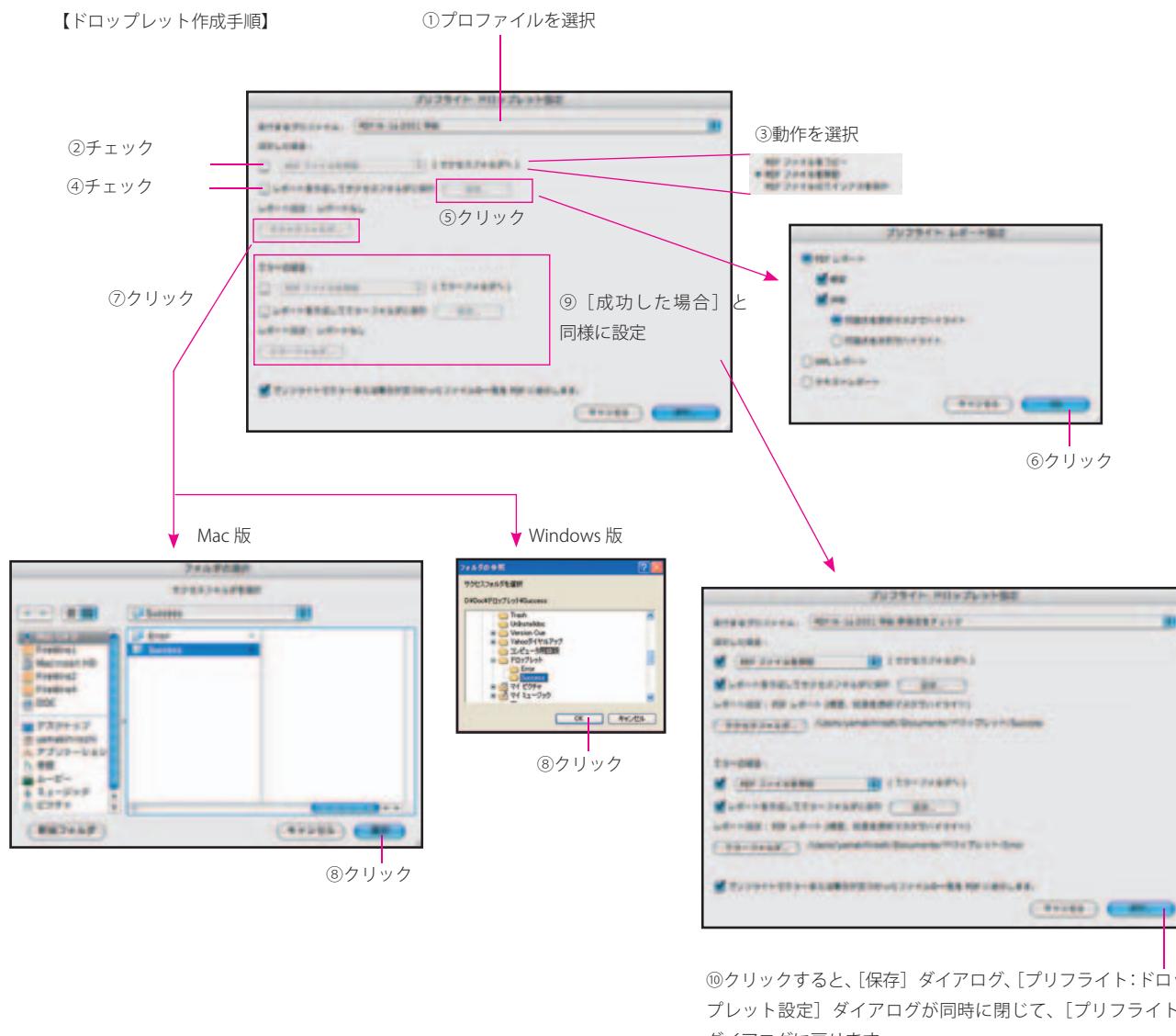
[成功した場合] 欄の直下のチェックボックスをチェックします。プルダウンメニューがアクティブになります。[PDF ファイルをコピー] [PDF ファイルを移動] [PDF ファイルのエイリアスを保存]

のいずれかを選択します。これらの動作は、プリフライトを実行し、成功した場合にそのファイルをどうするかを設定するものです。移動、保存先のフォルダは、[サクセスフォルダ] ボタンで設定します。[レポートを作成してサクセスフォルダに保存] をチェックすると、[プリフライト : レポート設定] ダイアログが表示されます。



【プリフライト : レポート設定ダイアログ】

【ドロップレット作成手順】



これはプリフライトレポートを外部ファイルとして保存する場合に表示されるダイアログと同じ内容です。詳しくは本書「レビュー」「プリフライト結果を外部ファイルとして書き出す」(9ページ) を参照してください。必要な設定を行って、[OK] ボタンをクリックします。

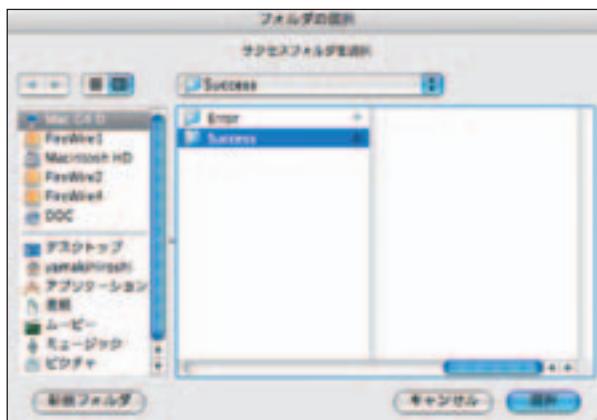
[サクセスフォルダ] ボタンは、プリフライトが成功した場合に該当ファイルをコピー、移動などをして収納するフォルダを設定します。この操作は Mac 版と Windows 版で少し異なります。

#### 【Mac 版】

[サクセスフォルダ] ボタンをクリックします。[フォルダの選択] ダイアログが表示されます。適当なフォルダを選択します。または、このダイアログの [新規フォルダ] をクリックすると新しいフォルダが作成されますので、作成後、そのフォルダを選択します。

[選択] ボタンをクリックします。[プリフライト：ドロップレット設定] ダイアログに戻ります。

#### 【フォルダの選択ダイアログ (Mac 版)】



#### 【Windows 版】

Windows 版では、[サクセスフォルダ] ボタン操作の後では新規フォルダを作成できませんので、あらかじめ選択するフォルダを作成しておいてください。フォルダを作成したら、[サクセスフォルダ] ボタンをクリックします。[フォルダの参照] ダイアログが表示されます。事前に作成したフォルダを選択し、[OK] ボタンをクリックします。[プリフライト：ドロップレット設定] ダイアログに戻ります。



[エラーの場合] についても、[成功した場合] と同じように設定します。

[プリフライトでエラーまたは警告が見つかったファイルの一覧を PDF に表示します] をチェックすると、レポートファイルとは別に、エラー、警告が見つかったファイルの一覧の PDF が作成されます。

[保存] ボタンをクリックすると、ドロップレットファイルが作成されます。ドロップレットファイルのファイル名は、プリフライトプロファイルと同じです。

[保存] ボタンをクリックすると、[保存] ダイアログ (Mac 版) Windows 版では [ドロップレットに名前を付けて保存] ダイアログ) が表示されます。任意の場所に保存してください。[保存] ボタンをクリックすると、[保存] ダイアログ、[プリフライト：ドロップレット設定] ダイアログが同時に閉じて、[プリフライト] ダイアログに戻ります。

#### ・ドロップレットの実行

ドロップレットを利用するには、プリフライトを行いたい PDF ファイル、またはフォルダを選択し、ドロップレットファイルにドラッグ & ドロップします。複数の PDF ファイルを選択して、ドラッグ & ドロップすることもできます。

7.0 Pro が起動していない場合は、自動的に起動し、プリフライトが実行されます。複数ファイルが対象になっている場合には、連続してプリフライトが実行されます。処理が済むと、対象ファイルは設定に基づいてコピー、移動などが行われます。[プリフライトでエラーまたは警告が見つかったファイルの一覧を PDF に表示します] がチェックされている場合は、7.0 Pro 上に一覧を表示した PDF が作成されます。

## 付録

## プリフライトプロファイルの概要

ここでは、7.0 Pro に搭載されているプリフライトプロファイルを一覧で示すとともに、その概要を紹介します。7.0 Pro には、印刷用途にはもちろん、その他の用途の文書のための非常に多くのプリ

フライトプロファイルが搭載されています。この一覧をリファレンスとして、日々の文書制作のチェックに気軽にプリフライト機能をご利用ください。

プロファイル名	概要
PDF/A (Draft) に準拠	PDF が PDF/A (Draft) に準拠しているかどうかを確認します。PDF/A は蔵書 (Archive) 用のフォーマットです。ISO 標準フォーマットとして素案 (Draft) が提案されています。
PDF/X-1a:2001 準拠	PDF が PDF/X-1a:2001 に準拠しているかどうかを確認します。PDF/X は、ISO が認定する印刷用フォーマットです。「1a」は、CMYK および特色のみの利用が許されています。「2001」では、Acrobat 4.0 (PDF 1.3) 形式です。
PDF/X-1a:2003 準拠	PDF が PDF/X-1a:2003 に準拠しているかどうかを確認します。「2003」では、Acrobat 5.0 (PDF 1.4) 形式です。
PDF/X-3:2002 準拠	PDF が PDF/X-3:2002 に準拠しているかどうかを確認します。PDF/X-1a と同じく印刷用のフォーマットですが、Lab などデバイスインディペンデントカラーの利用が認められています。
PDF/X-3:2003 準拠	PDF が PDF/X-3:2003 に準拠しているかどうかを確認します。
Web オフセット (コールドセット、CMYK および特色、中解像度)	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、コールドセットのオフセット輪転機での印刷用として処理できるかどうかを確認します。CMYK と特色を使用し、画像に標準の解像度のみを使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
Web オフセット (コールドセット、CMYK、中解像度)	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、コールドセットのオフセット輪転機での印刷用として処理できるかどうかを確認します。CMYK と特色を使用し、画像に標準の解像度のみを使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
Web オフセット (ヒートセット、CMYK および特色)	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、ヒートセットのオフセット輪転機での印刷用として処理できるかどうかを確認します。CMYK と特色を使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
Web オフセット (ヒートセット、CMYK)	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、コールドセットのオフセット輪転機での印刷用として処理できるかどうかを確認します。CMYK のみを使用し、画像に標準の解像度のみを使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
シートフィードオフセット (CMYK および特色)	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、オフセット枚葉機での印刷用として処理できるかどうかを確認します。CMYK と特色を使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
シートフィードオフセット (CMYK および特色、中解像度)	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、オフセット枚葉機での印刷用として処理できるかどうかを確認します。CMYK と特色を使用し、画像に標準の解像度のみを使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
シートフィードオフセット (CMYK)	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、オフセット枚葉機での印刷用として処理できるかどうかを確認します。CMYK のみを使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
デジタルプレス (カラー)	いわゆるオンデマンド印刷機で処理できるかどうかを確認します。白黒およびカラーを使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
デジタルプレス (白黒)	いわゆるオンデマンド印刷機で処理できるかどうかを確認します。白黒のみを使用します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
新聞広告	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、新聞広告として処理できるかどうかを確認します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
雑誌広告	業界団体が推奨するガイドラインに基づいて、雑誌広告として処理できるかどうかを確認します。また、PDF/X-1a (2001) に準拠しているかどうかを確認します。
100ppi 未満の画像を一覧表示	PDF ファイル内で解像度が 100ppi (dpi) 未満のカラーおよびグレースケールのビットマップ画像を一覧表示します。
1000ppi 未満のビットマップを一覧表示	PDF ファイル内で解像度が 1000ppi 未満の 2 値 (モノクロ) 画像を一覧表示します。
120ppi 未満の画像を一覧表示	PDF ファイル内で解像度が 120ppi 未満のカラーおよびグレースケールのビットマップ画像を一覧表示します。

プロファイル名	概要
150ppi 未満の画像を一覧表示	PDF ファイル内で解像度が 150ppi 未満のカラーおよびグレースケールのビットマップ画像を一覧表示します。
250ppi 未満の画像を一覧表示	PDF ファイル内で解像度が 250ppi 未満のカラーおよびグレースケールのビットマップ画像を一覧表示します。
300ppi 未満のビットマップを一覧表示	PDF ファイル内で解像度が 300ppi 未満のカラーおよびグレースケールのビットマップ画像を一覧表示します。
600ppi 未満のビットマップを一覧表示	PDF ファイル内で解像度が 600ppi 未満の 2 値（モノクロ）画像を一覧表示します。
Acrobat 3 との互換性	PDF ファイルで Acrobat 4 (PDF 1.3) 以降を必要とする機能を使用しているかどうかを確認します。
Acrobat 4 との互換性	PDF ファイルで Acrobat 5 (PDF 1.4) 以降を必要とする機能を使用しているかどうかを確認します。
Acrobat 5 との互換性	PDF ファイルで Acrobat 6 (PDF 1.5) 以降を必要とする機能を使用しているかどうかを確認します。
Acrobat 6 との互換性	PDF ファイルで Acrobat 7 (PDF 1.6) 以降を必要とする機能を使用しているかどうかを確認します。
CMYK または特色以外の画像を一覧表示	CMYK または特色を使用していないすべての画像を一覧表示します。
CMYK 以外のオブジェクトを一覧表示	CMYK または特色以外の色空間を使用している画像を一覧表示します。一覧には、特色オブジェクト、およびデバイスに依存しないカラーまたは RGB (Device RGB) を使用しているオブジェクトが含まれます。
CMYK 以外の画像を一覧表示	CMYK を使用していないすべての画像を一覧表示します。
ICC/Lab/キャリブレーションされたカラーを使用するオブジェクトを一覧表示	ICC ベースのカラー、Lab カラー、キャリブレーションされた RGB またはグレーなど、デバイスに依存しないカラースペースを使用しているすべてのオブジェクトを一覧表示します。
JPEG で圧縮された画像を一覧表示	JPEG 圧縮、JBIG2 圧縮および JPEG2000 圧縮を使用している画像を一覧表示します。
PostScript 3 のサポートが必要すべてのビットマップを一覧表示	適正な出力のために PostScript 3 のサポートを必要とするオブジェクトを検出します。
示	PDF ファイル内のすべての 2 値画像を一覧表示します。
すべての画像を一覧表示	PDF ファイル内のすべての画像を一覧表示します。
オーバープリントに設定された白のオブジェクトを一覧表示	白のオブジェクトで抜きに設定されていないものを一覧表示します。
スムーズシェードを一覧表示	スムーズシェーディングを使用しているすべてのオブジェクトを一覧表示します。
ダブルトーン画像を一覧表示	ダブルトーンまたはマルチトーンのすべての画像を一覧表示します。
ヘアラインを一覧表示	線幅が 0.25pt 未満のすべての線を一覧表示します。
一般的なファイル形式エラー * Windows 版にはない？	相互参照テーブルの不正なエントリや圧縮したストリームの不正な長さなど、PDF シンタックスに関する問題を検出します。
仕上がり領域 / 裁ち落とし領域内で Courier を使用しているテキストを一覧表示	仕上がり領域および裁ち落とし領域内で Courier を使用しているすべてのテキストを一覧表示します。
埋め込まれていないフォントを使用しているテキストを一覧表示	PDF ファイルに埋め込まれていないフォントを使用しているテキストを一覧表示します。
抜きに設定されている黒 100% のオブジェクトを一覧表示	100% 黒のみのオブジェクトで、オーバープリントに設定されていないものを一覧表示します。
抜きに設定されている黒 85% 未満のオブジェクトを一覧表示	黒 85% 以上のオブジェクトで、オーバープリントの設定がされていないものを一覧表示します。
文書から生成される版数が 2 を超える	文書を色分解したときの版数が 2 を超えるかどうかを確認します。
文書から生成される版数が 4 を超える	文書を色分解したときの版数が 4 を超えるかどうかを確認します。
文書から複数の版が生成される	文書を色分解したときの版数が 1 を超えるかどうかを確認します。
特色オブジェクトを一覧表示	特色を使用しているすべてのオブジェクトを一覧表示します。
白黒以外のオブジェクトを一覧表示	黒以外のカラーを使用しているすべてのオブジェクトを一覧表示します。一覧には、シアン、マゼンタまたはイエローを実際に使用している CMYK オブジェクト、特色オブジェクト、およびデバイスに依存しないカラーまたは RGB (Device RGB) を使用しているオブジェクトが含まれます。
透明オブジェクトを一覧表示	透明を使用しているすべてのオブジェクトを一覧表示します。

アドビシステムズ株式会社 〒141-0032 東京都品川区大崎 1-11-2 ゲートシティ大崎イーストタワー [www.adobe.co.jp](http://www.adobe.co.jp)

このドキュメントは Adobe InDesign® と Adobe Type Library に収録されているフォントを使用して制作されています。

Adobe、Adobe ロゴ、Adobe Acrobat、Distiller、InDesign、PostScript および Reader は Adobe Systems Incorporated (アドビシステムズ社) の米国ならびに他の国における商標または登録商標です。Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。Macintosh は、Apple Computer Inc. の米国およびその他の国における登録商標または商標です。その他すべての商標は、それぞれの権利帰属者の所有物です。